

北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V 50. 51号

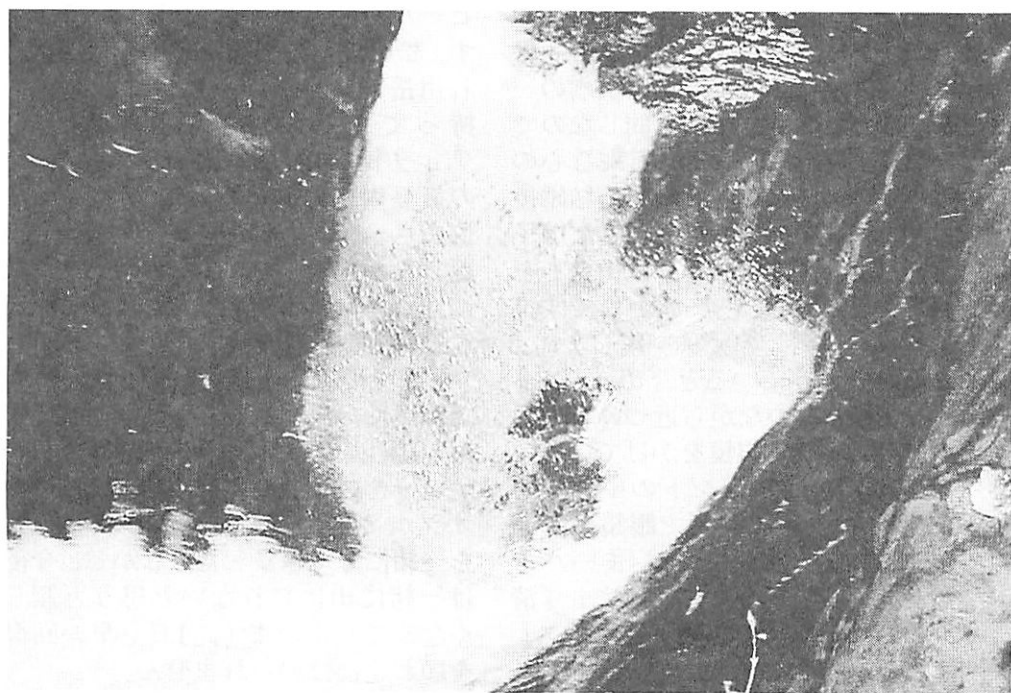
2003年7月～2003年12月



ACC-J 茨城

目指せヒマラヤ!!

ROCK AND VALLEY 2003夏 & 2003秋 No50 & No51



奥多摩水根沢でウォータークライミング Photo by SASAHIRA

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

山 仲 間

一人の人間の周りには友人・仲間が数十人はいると言われています。私にも友人・仲間は多数いますが、その中でも山仲間は特別な存在です。ACC-J東京の名雪氏の言葉を借りると山仲間とは『同じ釜の飯を食べ、お互いに命を助け合った間柄』との事です。そのような山仲間の一人、ACC-J東京の金沢清氏が2003年12月31日に徳本峠に向かう雪の中で急性心不全の為に還らぬ人になりました。金沢氏とは20代の頃からの付き合いで、厳冬期の北穂滝谷や厳冬期の谷川岳の一ノ倉沢をパートナーとして一緒に攀り、お互いに励まし合いながら吹雪の一夜を過ごした仲です。年齢も同じなのでお互いに遠慮なく言う事が出来る心の通ったパートナーの一人でした。結婚後一時は山から遠ざかっていましたが子育ても一段落して、これからは山登りを楽しむんだと言っていたばかりです。

『清チャン』『清』の愛称で親しまれ、誰かが何かを食べていると『チョット』『チョット』と言いながら近づいて来る愛嬌者でした。彼は眼鏡をかけているので冬山での食事時にテントの中で暖かい物を食べるときに湯気で眼鏡が曇るので、他人に遅れを取ってしまいハンディがあると常々言っていました。『清チャン』の思い出は食べ物と『う・こ』に関連した事が強烈に残っています。ある時に南アルプス甲斐駒ヶ岳の赤石沢奥壁を大武川から遡行して登攀した時に、粗末な食料で4日間を過ごした後なので腹が減ってしょうがなく、お地藏様にお供えしてあったおにぎりを見つけ、割ると糸を引いていたので躊躇したが空腹には耐え切れず有難く頂きましたが、その後2人共強烈な下痢に見舞われた事は言うまでも及びません。

ご冥福をお祈りいたします。

ACC-J東京の通称『社長』松原丈夫氏が年の瀬も押し迫った2003年12月10日に仕事上の事故で緊急入院し未だ意識が戻らないままである。松原氏とは厳冬期の岩壁登攀こそ一緒に登っていないが、無積雪期の岩壁は一緒に登っており、ここ数年はバックカントリースキーと沢登りのパートナーとして数多くの山行を共にしている。いつもザックの中に缶ビール数本を忍ばせていて頂上で美味そうにビールを飲む姿が目に見えられます。松原氏との強烈な思い出は、秋の谷川岳一ノ倉沢の登攀中に松原氏の持ってきたお弁当の玉子焼きをチョットご相伴に預かったのだが、その後登攀中に強烈な吐き気と下痢に悩まされ、ハーケンに掴まって嘔吐を繰り返しながらやっとの思いで国境稜線に辿り着いた事がありました。松原氏も遭難2歩手前の状態で4ルンゼを登り、国境稜線に辿り着いたとたんへたり込んだ記憶があります。ここ近年は50歳以上のオジサン連中でパーティーを組み穂高の屏風岩や、越後のオツルミ沢の遡行等心に残る山行を一緒にしてきました。しかし、今後は一緒に山に登れないと思うと寂しくなってしまいます。1日も早い回復を願わずにはられません。

自分の兄弟同様に心の通った仲間が山仲間です。ACC-J茨城&ACC-J東京には古くからの山仲間、気の許せる山仲間が沢山います。行きたくても山に行けなくなった前記の2人の分も合わせて体が動く限り山に登りたいと思うこの頃です。

木村 一

《目 次》

2003年 夏号 7月～9月 2003年 秋号 10月～12月 ACC-J 茨城

巻頭言	(木村) 1
目次	 2
集会報告	 3
山行報告	 4
西表島1ヶ月間サバイバル生活	(笹平) . . 5～13
吾が青春の山、谷川岳一ノ倉沢烏帽子奥壁南稜	(名雪) . . 14～16
初めての谷川岳、谷川岳一ノ倉沢烏帽子奥壁中央稜	(木南) . . . 16
谷川岳一ノ倉沢烏帽子奥壁凹状岩壁	(吉田) . . . 17
谷川岳天神尾根測量登山	(菊地) . . . 18
北海道一人旅 羊蹄山	(木南) . . . 19
笛吹川ヌク沢・甲武信岳	(鈴木) . . . 20
那須 井戸沢	(木村) . . 21～22
剣岳ハッ峰六峰Aフェース	(坂田) . . . 23
剣岳ハッ峰六峰Cフェース (剣稜会ルート)	(鈴木) . . . 24
剣岳ハッ峰六峰A～Bフェース	(木村) . . . 25
黒谷川小幽沢	(菊地) . . . 26
武甲山橋立川	(本図) . . 27～28
両神金山沢	(木南) . . . 28
奥多摩水根沢	(渡辺) . . . 29
那須 阿武隈川南沢	(木村) . . . 30
東黒沢～ナルミズ沢	(本図) . . . 31
北海道 カムイエクウチカウシ山～エサオマントッタベツ岳	(笹平) . . 33～35
北海道 サシルイ川～羅臼平	(笹平) . . 35～36
北海道 スビナイ川右俣直登沢～ソエマツ岳	(笹平) . . 37～39
北海道 モセカルベツ川	(笹平) . . 40～41
二口山塊名取川 大行沢～カケス沢	(坂田) . . 42～43
日本山岳耐久レース (長谷川カップ)	(渡辺) . . 44～45
清ちゃんとの最後の山行 (二子山中央稜)	(本図) . . 46～47
日光白根山	(鈴木) . . . 48
筑波山登山マラソン	(鈴木) . . . 49
谷川岳雪上訓練	(木村) . . . 50
《寄稿》女性パワーをいただきたい!	(本図) . . 51～52
友好山岳団体の月報・会報・その他	. . 53～54
編集後記	(木村) . . . 55

表紙 二子山中央稜をリードする木南 Photo by SASAHIRA

集会報告

〔於 土浦 Gusto〕

.....〔7 月〕.....

7月 9日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、鈴木、坂田

7月 23日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、坂田、鈴木、木南

.....〔8 月〕.....

8月 6日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、吉田、坂田、鈴木、木南

8月 20日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、笹平、渡辺、松井、坂田、鈴木、木南

.....〔9 月〕.....

9月 3日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、坂田、鈴木

9月 17日

出席者 本図、木村、菊地、渡辺、坂田、鈴木、木南、須賀

.....〔10 月〕.....

10月 1日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、坂田、鈴木

10月 15日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、坂田、鈴木、木南、須賀

10月 29日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、坂田、鈴木、木南、須賀

.....〔11 月〕.....

11月 12日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、坂田、鈴木、木南、須賀

11月 26日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、坂田、鈴木、木南、須賀、鯉河

.....〔12 月〕.....

12月 10日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、坂田、鈴木

12月 24日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、坂田、鈴木、木南、須賀、鯉河、中島

山行報告

《2003年7月～12月》

..... [7 月]

7月 6日	谷川岳一ノ倉沢中央稜	L吉田、木南
7月 6日	谷川岳一ノ倉沢南稜	L木村、名雪、須賀
7月 19日	那須井戸沢	L木村、菊地、坂田、鈴木

..... [8 月]

8月 3日	谷川岳一ノ倉沢凹状岩壁	L吉田、渡辺
8月 3日	谷川岳天神尾根	L本図、菊地
8月 3日	笛吹川ヌク沢左俣	L坂田、鈴木
8月 3日	北海道 羊蹄山	木南(単独)
8月 10日	那須井戸沢	L木村、笹平、吉田、木南
8月 15日	剣岳ハッ峰六峰Aフェース	L吉田、坂田、鈴木
		L木村、名雪、松原、金沢
8月 15日	剣岳ハッ峰六峰Bフェース	L木村、名雪、松原、金沢
8月 15日	剣岳ハッ峰六峰CAフェース	L吉田、坂田、鈴木
8月 15日～8月 16日	黒谷川小幽沢	L菊地、鯉河、須賀
8月 24日	武甲山橋立川	L本図、渡辺
8月 24日	両神 金山沢	L笹平、吉田、木南
8月 31日	奥多摩 水根沢	L本図、木村、菊地、笹平、吉田、木南 鈴木、須賀、松原、小笠原

..... [9 月]

9月 6日	前川大滝沢	L渡辺、小笠原
9月 7日	那須阿武隈川南沢	L木村、笹平、吉田、木南
9月 15日～9月 16日	東黒沢～ナルミズ沢	L本図、木村、渡辺、木南、名雪、松原
9月 30日～10月 1日	大行沢～カケス沢	坂田(単独)
9月 15日～9月 17日	エサオマントツタベツ岳	笹平(単独)
9月 21日	サシルイ川～羅臼平	笹平(単独)

..... [10 月]

10月 4日～10月 5日	ヌビナイ川右股直登沢 ～ソエマツ岳	笹平(単独)
10月 12日	モセカルベツ川	笹平(単独)
10月 25日～10月 26日	長谷川カップ	渡辺

..... [11 月]

11月 2日	二子山中央稜	L本図、小林、名雪、松原、金沢
11月 22日	日光白根山	L鈴木
11月 23日	二子山中央稜	L笹平、吉田、木南

..... [12 月]

12月 7日	筑波山登山マラソン	L鈴木
12月 14日	谷川岳雪上訓練	L笹平、木村、吉田、坂田、鈴木、木南、須賀

西表島 1ヶ月間サバイバル生活

2003. 6. 20～7. 19

パーティー L 笹平 孝 (単独)

去年の11月、初めて西表島の南風見田から鹿川そしてウダラを訪れた。その時、日本離れした動植物が豊かに生息している南の楽園のような所が、この日本に存在した事に自分の中で大きな衝撃が走った。川はマングローブに囲まれエビやカニが生息し、山にはバナナやヤシの実があり、海には貝やカラフルな魚がたくさん泳いでいる。この大自然と一体になりたいくて、西表島の西にある崎山半島で1ヶ月間テント生活してみようと思い立った。

6/20 羽田空港から石垣島へ飛び、石垣島から船で西表島へ渡り、送迎バスで白浜まで行き、また船に乗り最終部落の船浮へ渡った。移動中は石垣島の郵便局で荷物を受け取り、余計な荷物を預けたり、途中でビールを1箱分買出ししたりとかなり慌ただしかったが、羽田から船浮まで約7時間で着いた。

ここから西側にあるイダの浜に出て砂浜を歩いて行く。すでに西表島は梅雨明けしているので真夏の暑さになっている。30キロは軽く越える荷物を背負い、灼熱の太陽を浴びながら歩くのはかなりキツイ。汗ですぐにびっしょりになり、30分も歩かないうちにビールタイムになる。やがてユナラ川河口の広い干潟を横断し、正面にある山を暑さでフラフラになりながら山越えして網取湾に出た。この時点で3本目のビールタイムになる。

本日の目的地ウダラ川は網取湾の奥にあり、遠くにウダラの砂浜が見える。あまりに暑いので海の中ををジャバジャバ歩いて行くことにする。船浮

から3時間でウダラに到着した。ウダラには、10年位前まで砂川恵勇という人が住んでいた場所で今もその面影が残っている。

今回、このウダラをベースにしてサバ崎や崎山半島を一周しようと思う。もう17時を過ぎていたので急いでテントの準備に取りかかる。あちこちにオカガニの巣穴があるが、かまわずその上にテントとタープを張り、スコール対策にテントの周りに排水溝を掘った。薪を集め夕飯の用意などいろいろやる事があるので忙しい。西表島は夕日が沈む時刻が遅い為、夜は20時を過ぎないと暗くならないので驚いた。

6/21 去年ここで会った高橋さんが買出しから戻り、半年ぶりの再会となった。この人は去年ここで8月から12月まで暮らし、今年は3月からここで暮らしている。今回、突然の訪問にとっても驚いていたようだが、今年もここで暮らしているなんて凄いなあと思った。この日の夜は、海で捕ってきたミナミクロダイの刺身や貝をつまみにして夜遅くまで泡盛を飲み交わした。

誰もいない無人島のような所で人に会うと、とても安心感があり特に夜は動物の鳴き交わす声にビクビクさせられていたが、今は何の不安も無く過ごす事が出来る。この辺りはいろんな動物が生息しており、特別天然記念物のカンムリワシが上空を飛び、天然記念物のセマルハコガメが足元をノソノソと歩いている。

なんといってもリュウキュウアカショウビンがとても綺麗だ。カワセミ

に似た感じの鳥で全体が鮮やかな赤色をしている。鳴き声も変わっていて、早朝と夕方に独特の鳴き声がジャングルに響き渡る。夜になるとテントの周りにはオカガニが歩き回り、リュウキュウコノハズクやアオバズクの低い鳴き声に包まれる。

毎日の日課は海に魚や貝を捕りに行く事で、潮が引いたらシュノーケルを付け釣り糸を手にとって海に入る。浅い所ではクモガイやスイジガイ、タカセガイ、シャコガイ、カキが捕れる。

海の中にはいろんなサンゴがあって、ここで初めて海に入った時は感動の連続だった。エダサンゴが群生している所にはカラフルな熱帯魚がたくさん泳いでいて水族館よりも圧倒的に凄い。餌をやると周りはたちまち熱帯魚だらけになっておもしろい。

イソギンチャクにはオレンジ色に白いラインが入ったカクレクマノミが数匹、出たり入ったりしているのが真近で見られる。どんどん沖へ泳いで水深10メートル位になると、サンゴ礁にいた熱帯魚とは違う種類の大きな魚に変わり、釣り針にカニを付けて木に巻いてある糸を送り出す。とても簡単な仕掛けで魚を釣る。

真夏でも裸で泳いでいると1時間半が限界で、だんだん指先がしびれてくる。嫌いな魚はカワハギで、簡単に餌だけを持ち逃げして、あっという間に釣り針だけになる。良く釣れる魚はタマンというフエフキダイで、30センチクラスになるとかなり引きが強い。河口付近では、ミナミクロダイが釣れる。この魚は警戒心が強いので、岸からリール竿で餌を投げ込んで釣る。西表島の魚では一番おいしい。

漁が終わると木陰でのんびり過ごす。ボーっと海を眺めていたり昼寝をしたり、アダンの実を食べながら音楽

を聴いたり、これからの予定を考えたり。夕方になると夕飯の準備にかかる。刺身を食べ酒を飲む事がいつもの楽しみでもある。川に浸していた魚を引き上げ、刺身を作りアラは味噌汁。貝や小さい魚は焼いて食べる。米は朝夕合わせて一合を炊く。日が沈む頃にはビールを飲み泡盛を飲み刺身を食べる。毎日がとても贅沢に感じた。

6/26 ウダラに来て七日目、サバ崎一周に出発する。山越えをして来た道をいったん戻り、ユナラ川河口の広い干潟に出る。今回ここがスタート地点になり、ここから反時計回りに海岸線を歩きサバ崎からウダラに戻るコースにした。

干潟から30分ほど歩いた砂浜には飯島さんが住んでいる。この人とは数日前にウダラで会っていて、今はウダラに引越す準備をいている。飯島さんは数年前からこの辺で暮らしており、テレビにも出たことがある有名な人でもあった。ギターを弾くのが趣味で、いつも皮の帽子を被っている。

ブルーシートで囲まれた飯島さん宅に寄ってみると、あやしい魚を焼いていた。今朝、フグが釣れたので遠慮しないで食べてって、30分経って何もない平気だから。と言われ、少し迷ったがフグをご馳走になる。なかなかワイルドな味だった。

飯島さんと別れ、いくつかの砂浜を越えるとコンクリートで出来た船着場と道が現れる。この道は、近くにあるサバ崎の灯台まで続く。サバ崎周辺は断崖絶壁になっていて、どこから降りれば良いのか迷う。灯台から少し戻りアダンの中を良く見ると、浮きの目印がありそこから西側

の砂浜に降りられた。砂浜を回り込むとゴリラ岩が現れ、海の向こうには東海大学研究所も見える。網取湾側の海岸線も比較的歩き易い。途中にある岩のトンネルを過ぎると間もなく山越えルートの分岐に着く。後は、ウダラまで歩き慣れた砂浜を貝でも捕りながら行こう。

6/27 崎山半島一周に出発する。ある程度の食料を持ち、残りの後半分の食料などはウダラにデポしておく。崎山半島一周の中で、ウダラから網取までの間に一番の難所がある。そこは潮位がかなり下がらないと通過出来ない所なので、今回は大潮の干潮時に合わせて出発した。

ウダラ川やアヤンダ川周辺は一面干潟が広がり、対岸まで回り込まずに浅瀬を直線的に通ることが出来る。対岸の岩場を歩き出すと目の前に難所が現れる。そこは300メートルくらい岩壁が続いていて、海の中を歩いたりへつりながら行くしかない。

途中、足場が無く深みを通る所が二ヶ所あり、今回は潮位40センチで腰から胸下まで海水に浸かった。波は穏やかなのでそれほど心配なく行ける。ここをクリアすれば、この先にある岩壁の所は膝上程度しか浸からないので安心できる。

ここを過ぎると広い砂浜に変わり、東海大学研究所が見えてくる。この辺りはサンゴ礁スポットになっていて、ダイビングツアーの船が出入りしている。若いツアー客の目の前で、Tシャツにパンツ姿で歩いているからちょっと恥かしい。でも、10分も経てばなんだか慣れてきた。ウダラを出発してから2時間で東海大学研究所に着いた。

ここはもともと網取村跡で村全体が研究所に利用されている。網取村跡か

らは、岩場が多くなり岩の上を歩いて行く。ウルチ崎の手前は巨岩地帯になっていて、ある程度潮が引いていないと海回りで行けない所が1ヶ所あり、今回は股下あたりまで浸かりながら通過した。

ウルチ崎からは遠くにパイミ浜が見え、この先から崎山湾となり歩き易い砂浜に変わる。ウボ川とバイダ川が流れ込む崎山湾の奥の方では、干潮時になると海が消えたように一面干潟になり対岸まで600メートルほどを簡単に歩いて行ける。

対岸には崎山村跡があり、船で来た人達がテントを張っていた。ここには石垣島に住んでいる上地さん夫妻と若者が3名遊びに来ていて、ウダラで暮らしている高橋さんと知り合いだった。今日はここにテントを張ろう。近くでオオタニワタリの新芽を摘んできて焼きそばを作る。

6/28 この先パイミ浜へは潮が引くまで進むことが出来ないの、暇つぶしに南へ少し行った所にあるバイダ川に行ってみる。

ルアーを投げるといきなりヒット。コトヒキが釣れた。釣れた魚はすべて逃がして、パイミ浜へ出発する。砂浜を過ぎると岩場になり、やや危険な所も出てくる。岩場を回り込むとパイミ浜の広い砂浜が目の前に広がる。

青い空に透き通る青い海そして白い砂浜、見るものすべてがすごく綺麗で、まさに南の楽園だ。砂浜を延々と歩き、突き当たりの岩壁近くにテントを張る。

パイミ浜は西表島の最西端にある砂浜で、今回ここで四日間過ごす予定だ。

水場は近くの沢筋を200メートルくらい歩いた所で汲める。目の前の海

は、潮が引くとリーフが現れサンゴがむき出しになっている。リーフの切れ目から先はドン深になっていて、一気に10メートル以上深くなる。そこにはたくさんの熱帯魚が泳ぎ回り、びっしりとサンゴ礁に覆われていた。

透明度の高い海水は泳いでいても海の中とは感じさせず、まるで空を飛んでいるかのように思えてくる。釣り糸の長さが15メートル位あり、これ以上深くなっても海底の物がよく見えるので、軽い高所恐怖症にもなった。数メートル先には大きなナポレオンフィッシュが堂々と泳いでいてこちらを見ている。いつの間にか夢中になって泳ぎ回っていた。

パイミ浜は夕陽が美しい所でもあり、夕方になると心地良い風が吹き抜けるなか、砂浜に座って毎日眺めていた。

夜、テント裏のアダン林からガサガサと音がするので、ヘッドランプで照らしてみると大きなヤシガニが歩いていた。大きなツメが危ないので注意しながら掴むが、けっこう力が強くて一度放したら意外と逃げ足が速い。なんとか捕獲に成功した。翌日、明るくなってからヤシガニのツメを針金で縛ってよく観察してみる。なんかシッポの部分がクモに似ていて気持ち悪い。コッヘルに水と海水を入れて沸かし、ヤシガニを茹でると赤くなった。ツメはカニのツメと同じ感じの味で、シッポの中のミソは、ほろ苦さがあった。

今日、船で二人組がパイミ浜にやって来た。四日間ここで過ごすみたいだ。ここでは一人の方が何かと楽しかったので少し残念。素っ裸で泳いだり、日光浴したりが出来なくなった。

今日のおかずはタカセガイと熱帯魚の刺身、そして初めて食べるシャコガ

イの刺身が加わりで豪華になる。翌日は、集中的に貝を探しに行く。チョウセンサザエ、タカセガイ、タカラガイ、ホラガイが捕れた。二人組に貝を少し分けて残りは容器に入れておき、今度は魚を1匹釣りに出かける。

今日の漁も終わり、日陰でくつろいでいるとテントのそばをサソリが歩いている。このサソリは小さいが毒針もちゃんと付いていた。この場所ほんとに大丈夫かなあ、ちょっと心配。ケースに入れておいたら暑さで死んでしまった。

夜は星が綺麗で、天の川も良く見える。何気なく携帯電話の電源を入れてみると、アンテナがかるうじて1本立ったのには驚いた。さっそく電話をかけてみる。船浮、ウダラ、崎山村跡では圏外だったのでパイミ浜で携帯電話が使えるなんて思いもしなかった。

7/1 パイミ浜に来て四日目、干潮が14時だけど余裕があった方がいいので早めに11時頃出発した。歩き始めから大きな岩の上を歩いて行く。しばらくはこの岩場が続き、ヌバン崎を過ぎるとやや歩き難い石ころに変わる。しばらく歩いていると、リーフがかなり浅くなってきたので途中からジャバジャバとリーフの上を歩いて行く。

断然こっちの方が歩き易い。しかしとても暑い。日陰で休みたくてもさえぎる物が何もない。真夏の強い陽射しが容赦なく照りつけ頭がフラフラしてくる。大きな岩が出てきたので、狭い日陰にへばり付くように休み体温を下げる。

大きな岩の塊が海に突き出でているウビラ石を過ぎればウビラ川までもう一息だ。野生のバナナの木が所々にあり、良く見るとモンキーバナナくらいの大きさのバナナがあったのでもぎ

取った。黄色く熟したバナナは甘くておいしいが、種が多いのでえらく食べにくい。残りはザックに入れ、後でおやつにする。

今日の目的地ウビラ川に着いた頃には、完全に熱中症になってしまい気分が悪い。海で泳いで体温を下げ、水をたくさん飲んで3時間ほど寝たら完璧に回復した。

近くで20センチと30センチのシャコガイを見つけバールで剥ぎ取り、小さい方を刺身とバター焼きで食べた。ウビラ川河口の西側には岩壁がえぐれて出来た広いテラスがあり、昼間の強い直射日光や雨がしのげてかなり居心地が良い。

ただ一つだけ気になる事は、西表の資料に目を通していた時に、この場所で人が死んでいたと書いてあったことぐらいだ。夜になると遠くに波照間島の明かりが見える。岩のテラスにマットを敷いて横になり、まさにこの状態で発見されたのかなと、いろいろ考えてしまうと怖くなってきた。焚き火がパチンと鳴るたびにビクンとなり驚かされた。

7/2 朝からルアーを投げて魚釣りをすると得体の知れないでかい魚がヒット、糸をプツンと切って逃げて行った。とてもくやしい。その後、カワハギが釣れたのでおつまみにあるカワハギを作ろうと思い、海水とトウガラシをかけて串で乾かす。キモはもったいないので、しょうゆを付けてそのままぺろりと食べる。

潮が引いてリーフが現れ始めたので、そろそろ出発の時間だ。ザックには大きい方のシャコガイとカワハギのおつまみをくくり付けてウビラ川を出発する。完全に潮が引いたリーフは道路と同じくらい歩き易いので、海岸を歩

くのととは比べ物にならないくらい効率よく進める。

落水崎を回り込むと落水の滝が2段になって流れ落ちている。この先になるとリーフにはサンゴ礁が混じり、膝くらいまで海水に浸かりだす。たまにボリボリとエダサンゴ踏んだりするので足元に注意して歩く。するとクモガイやスイジガイがあるわあるわ、鹿川まで気分良く歩けた。

今回持ってきた食料が無くなるまで鹿川で過ごす事にする。半年前ここに来た時テントを張った一等地には、他のテントが張ってある。しかたなく他の場所にテントを張った。しばらくすると本格的なモリを持ったおじさんが、大きな魚をぶら下げて海から上がって来た。見せてもらうと70センチ級のビックマンタだった。夕方、このカマの塩焼きをご馳走になり油がのついてとてもおいしかった。もう魚だけでおなかいっぱい状態。この人は石垣島の人で、石垣島からここまでカヌーでやって来て2週間ほど鹿川で過ごすそうだった。

鹿川の手前は砂浜から急に深くなり魚釣りには適した所で、浜から少し泳ぐだけでいいポイントに行ける。

ここで泳いで魚釣りに行った時、小さな魚がかかりそこへ一回り大きな魚が食い付いて来たので、それからはこの釣り方に変えて大物狙いになった。

手前の方で小さな魚を釣り、泳がせながら奥にあるポイントに向かって泳いでいたら、いきなり強い引きがあり手で持っていた糸が海底に向かって引つ張られ体が海面から沈み込んだ。ヤバイと思った瞬間、糸が切れた。糸は小さな棒に巻いてあつ

たが、糸を手で掴んでいたの指の肉がパッキリ切れていた。身を持ってこの釣り方の危険性を学び、次からは棒の方を手で持ち、でかい魚がかかったら手を離す事にする。

そして40センチ級のユカタハタを釣り上げた。魚は小さい物より大きい方が油ものっていておいしくなる。

担いで来た大きいシャコガイをここで食べる事にしよう。海辺でシャコガイを解体していると、カヌーに乗った二人組がやって来た。特盛りの刺身が出来たので、二人組に分けたら喜んで食べていた。石垣島のおじさんにもシャコガイの刺身をあげようとしたら、貝は食べられないそうだ。1人では全部食べ切れなかったの、残りは串に刺して干物にする。

ウビラ川から持って来たカワハギは売っている物とは違う食べ物になったが、おいしく食べられた。

鹿川にはバナナとヤシの実があり、去年はまだ青いバナナがたくさんあったのに今年は全く見当たらない。ヤシの実は小さい実が数個ぶら下がっている。せっかくなので、ヤシの実ジュースとココナッツミルクのデザートを食べた。

崎山半島の中では、鹿川が一番生活しやすいと思う。近くに水場があり、少し離れた所に小さな滝があり海から上がった時にはシャワーとして使える。漁をする時もあまり沖まで泳がなくても大型の魚が釣れるし、砂浜が広いので開放感がある。そして、携帯電話が使えるので安心だ。欠点は、すぐに慣れると思うが波の音がうるさい。

7/6 鹿川に来て5日目、食料がほ

とんど無くなったので、今日はウダラに移動する。おみやげのやしの実とバナナをザックに入れた。鹿川からウダラまでの道は、去年通っているの何の心配もない。途中でまだ小さいシークワサーを何個か採って行く。

ジャングルの中の道は、この前の台風で木がなぎ倒されたりして荒れていたが迷うことは無い。ウダラ川の源流から沢沿いに降りて行き、河口近くになるとマングローブに囲まれ川の中をジャバジャバ歩く。干潮時なので深くても股下くらいで行ける。途中から右岸のマングローブ林沿いに歩いてウダラの砂浜に出た。

ウダラに戻ると、崎山村跡にいた若者がひとり来ていた。そして、近くに住んでいた飯島さんもウダラに引越していた。飯島さんにはここで食べられる物を教えてもらったり、いろんな生活の知恵を学ばさせて頂いた。おかずの調達も、今までよりもさらにパワーアップして、薬味になる草を摘んだり砂浜を走るツノメガニを捕まえ、浜で小さなハマグリを掘り出し、カニカゴを借りて大きなノコギリガザミを捕らえたりと広範囲になる。

猛毒の針があるイモガイも貴重なタンパク源だ。漁に出ていた時、ガーラというカスミアジの群れに出会い、1メートル級のガーラが餌の小魚に食い付いて来た時はマジでびびった。ウダラに戻って来てからは、よく素っ裸で海に入る。自然のままの姿でサンゴ礁の広がる海の中をウミガメと一緒に泳ぐ。この開放感を味わうと気分爽快になりやめられない。

夕方になると集まって泡盛を囲み飯島さんの弾くギターを聴いたり、その日捕れたおかずを食べたりと賑やかな夜が続いた。西表島に来てからは主に魚や貝しか食べていないので、肉とか

野菜が食べたくなってくる。

7/14 西表島に来てから25日目、持って来た26合分の米もほとんど無いのでここを離れる時がやって来た。

ウダラから船浮の近くにあるイダの浜へ移動する。船浮には小さな売店があるので、ここまで来れば安心だ。イダの浜にテントを張りビールを買いに行く。

途中、落ちていたアップルマンゴーを手に入れたので食べてみる。今まで甘い物は全くたべてなかったので、この世の物とは思えないくらいうまい。サバ崎の灯台が光り始め、沈む夕日を見ながらビールを飲んだ。夜中に目を覚ますと、イダの浜は驚くほど明るくなっていたので散歩に出かけてみる。満月の光に照らされて海が輝いていた。今回、イダの浜で2泊する。

7/16 イダの浜を出発し昼の船で白浜へ渡った。次のバスまであと2時間もあるので、白浜を散策して時間をつぶす。バスで星砂の浜まで行き、星砂キャンプ場にテントを張る。

星の砂海岸は砂浜全部が星の砂なので、寝転ぶとチクチクする。目の前には大きな潮溜まりがあり、ここでみんな泳いだりしている。砂浜からリーフの切れ目までは200メートルくらい歩かななくてはならない。

ここもリーフの切れ目から先は水深20メートルくらいの所もあって、サンゴ礁が広がりとくさんの熱帯魚が泳ぎまわってきれいだった。ここでも魚を釣り、貝を捕った。キャンプ場だとなんか違和感があってのんびり落ち着けなかったが、水道は便利だなあと感じた。

今まで沢の水を使っていたので、増水すれば濁るしコッヘルに水を汲むと一緒にエビまで入ってきたりと衛生的

に良くなかった。蛇口を回せばいつでもきれいな水が使えることは、生活する上でもっとも安心できることだ。

7/18 朝一番のバスに乗り、ユツン川の橋で降ろしてもらう。去年、イタジキ川からユツン川そして古見岳に行った時に、ユツン川で迷ってとても苦労したので、西表島の最後にユツン川を下から登りたいと思っていた。

橋から50メートルほど南に歩くとアダンの茂みの中に林道の入り口があった。林道はユツン川沿いに続いている。30分も歩くと最初の二俣に着いた。暑さと湿度は半端ではない。滝のように汗が流れ落ち、濡れたTシャツを絞る。ダイエットをするなら真夏の沖縄で登山するのが手っ取り早い。

標高100メートル付近にある二俣から道が無くなり沢の中を歩く。しばらくすると左側に道を発見し、ユツン川の大滝に辿り着く。大滝は2段になっていて、水量が少なかった。大滝を巻いた所で完全に道が無くなり、沢の中を歩いて行く。滝上の二俣を過ぎると見覚えのある沢になった。

去年の11月に比べると水量は5分の1以下だろう、かなり少ない。水量が少ないおかげで、簡単に沢の中を遡行できる。標高300メートル付近から水が涸れ、やがてユツン川とイタジキ川のコルに着いた。ここはテン場になりそうな所は狭く藪で覆われている。ここから小高い山をヤブ漕ぎで傷だらけになって越えると、ユツン川と相良川のコルに着いた。

こちらの方がテン場が広くて快適そう。相良川の源流を降りると登山道に合流する。古見岳には登らず、相良川沿いに登山道を降りて行く。数回渡渉を繰り返し道路に出た。ここから古見のバス停へ向かって歩いて行く。

今日はバス停近くで泊まろうと思
い、小学校の前で水を汲んでいると車
が目前で止まった。若い男の人に乗
せてくよと言われ、遠慮なく大原港ま
で送ってもらう。この人は、同じ茨城
県から来ていて取手市出身の人だっ
た。西表島に住んで2年になり、近く
の農園で働いてるそうだ。今日は大原
港でマットを敷いて寝た。

7/19 朝、郵便局へ行き局止めで
送ってあった荷物を受け取り、昼の船
で石垣島へ渡った。

今回、西表島では自然の中で生活す
るという貴重な体験ができた。西表島
のゆっくりと流れる時間を、自然の中
に溶け込み体で感じられたことがとて
もうれしい。そして、普段の生活では
お腹がへればいつでも食べ物が買える
が、ここでは自然の中に生きる動物を
捕まえて食べることで、これが生活の中
心にあった。初めはおもしろ半分だっ
たが、いつの間にか当たり前のようにな
ってくる。人間が本来持っている狩
猟本能というか、何かそれに近い感覚

に自分が変わっていた。食べ物があれ
ば生きられる、それ以上のことは望ま
ないし必要も無い。この大自然がそう
させているようだ。

6/20 船浮 (14:30) -ウダラ (17:
30)

6/26 ユナラ川側の山越え入り口
(9:40) -サバ崎 (12:40) -網取湾
側の山越え入り口 (13:20)

6/27 ウダラ (11:10) -網取村跡
(12:40) -ウルチ崎 (13:40) -崎山
村跡 (14:30)

6/28 崎山村跡 (10:30) -パイミ浜
(11:20)

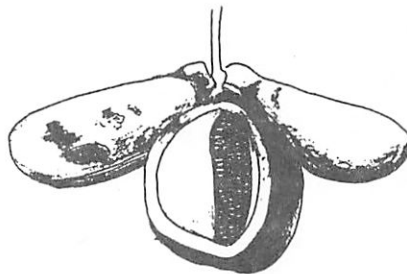
7/1 パイミ浜 (11:00) -ウビラ石
(13:40) -ウビラ川 (14:40)

7/2 ウビラ川 (13:00) -落水崎
(14:00) -鹿川 (15:10)

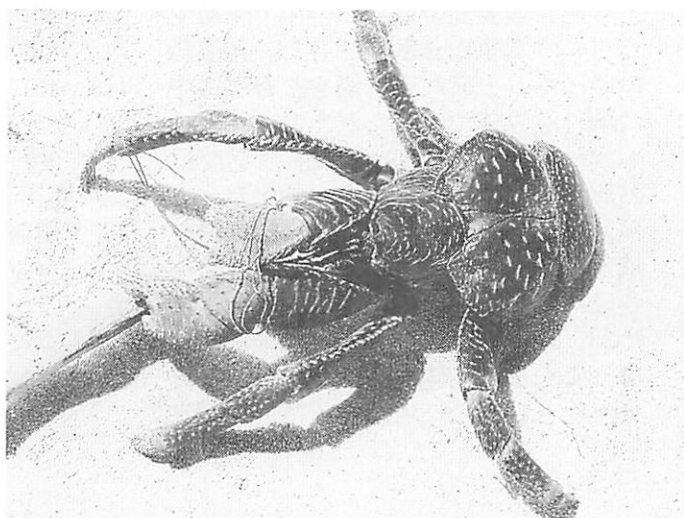
7/6 鹿川 (15:00) -峠 (15:30) -
ウダラ川河口 (17:20)

7/18 ユツン橋 (9:00) -大滝 (11:
00) -イタジキ川のコル (13:10) -相
良川のコル (13:30) -道路 (16:
00)

(笹平 記)



西表島サバイバル生活での豊富な食材 Photo by SASAHIRA



吾が青春の山、谷川岳一ノ倉沢烏帽子奥壁南稜ルート

2003. 7. 6

パーティー L 木村 一、須賀泰司、名雪博二 (ACC-J東京)

7月5日(土曜日)

早朝、家から車で10分ぐらいの所に、今年の春から地面を借りた、造園屋がやたら木を植えた所なので、春30坪ぐらい木を伐採して畑としたが、まだ畑の面積が足りないのと、夏になって木々の葉が繁り、畑を日陰にするらしく、畑のはじの方が苗の伸びが悪い、これを何とかするべく、早朝より木の枝落としをする。

昼ごろまでにはもう汗がちっとも出なくなり、目が霞んでくる、頭がくらくらする、とにかく暑い。そこで一息入れあらためて見ると、我ながら見事な物で、今までより畑がひと廻り大きく広がった様に見える、りっぱりっぱ。

家に帰りシャワーで汗を流して、昼寝。16時50分位には我が愛車、赤帽サンバーを駆って、一路湯檜曾の我が別荘(湯檜曾公園あずまや)の名雪荘を目指す。

大分昔の話になるが谷川岳一ノ倉沢の壁を登ったのは、生井が墜落して、これを救助に行ったとき以来で、この時は雨がジャージャー降っていたので、鮎タビを履き、傘を差して、テールリッジを越え中央壁本庄ルートを何ピッチか登った。

これは救助を目的とした山行であり、(でも結構楽しかったけど)、本当に登攀を楽しみに来たのは、これ以前10年ぐらい前のことだから、かれこれ20年以上一ノ倉の岸壁はご無沙汰である。

果たして巧く登れるだろうか? 素朴な疑問と一抹の不安が頭をよぎる。

途中のスーパーでの買い物などして

例の名雪荘に22時ごろ到着。

早速スーパーで買ったビントロの刺身とウルメイワシの干物、をつまみに、缶ビール500ml 2本と白波芋焼酎を前に単独大宴会が始まる。

ラジオを聴きながら、ローソクの灯りでカップの中の焼酎がきらきら揺れる、谷川名物霧シオンも降ってきて、実に良い時間である。

俺はこういう、ゆったりと流れるような時間が好きだ、山で登攀また歩いて登り、目標がぐんぐん近づくのも快感だが、全く動かず、停滞し沼の底のような此の時間も実に良い物だと思う。

さんざん酔っぱらった頃ACC-J茨城の本隊到着。こんな良い別荘を放棄して今から一ノ倉出合に行くとのこと、もう運転出来そうもないので、茨城の木村リーダーに運転してもらい、一ノ倉出合に着く、雨は霧シオンでなく、本シオンである。

7月6日(日曜日)

相変わらず朝まで雨が降り続き4時30分~5時00分ぐらいにみんな見切りを付けて帰って行く昨日の夜はこの駐車場に車がイッパイだったのがどンドン車が少なくなっていく。

そうこうしてる内に外国人の女が居る事が変に気になった、どう見ても観光客ではない、谷川岳の山歩きか何かやりそうな感じだ、外国人の女と言っても若い女ではない。ちょっと若げなおばさん風だ。日本人のおじさん二人と来ているようだ。しかし良い体しているなーと見ていると、何と男2人の内2人とも見覚えのあるオッサンだ、1人は宇都宮白鳳会の人で名前は忘れ

た、もう一人は昔東京ACC-Jに在籍していたSだ。

あの野郎まだ山やめらんねーで、しかも外国人の女引っ張り込んで、すけべなやつちゃな一。

その昔東京ACC-Jに、それは美しい美人が2人も入っていたことがある。その時の一人がA氏夫人となってしまうW子だ。もう一人がリンちゃんだ、美人で可愛い、この子にあからさまに言い寄ったのがSだ。ACC-J会員が多数参加した谷川山行の帰りの汽車の中、停車駅でSがアイスクリームを2つ買ってきて何人もの前でリンちゃんだけに一つをあげた。貰ったリンちゃんはこれまた同じ美人のW子と一緒に居るので、気まずくて喰えない。そこで困ったリンちゃんはW子に半分ずつ食べましようと思ちかけて、やっと喰う事が出来たと言う話だが、自分のことだけを考えて、相手、他の事を全く考えない奴だった。こういう奴はもてない一つ一。これは有名な話です。

んで、大分遅くまで粘って、7時を過ぎ、天気はあまり良くないが一応雨は上がったので、再び降ってきたら敗退として、せめてテールリッジだけでも登ってみようと思出した。

今年は残雪が多く、ヒョングリの滝は雪溪の下で埋まって見えない。中央稜の取り付きで、吉田、木南パーティーと別れる。9時近いと言うのに中央稜には他のパーティーは居ない。衝立も居ない。コップも居ない。滝沢方面もだれも居ない。烏帽子スラブを行くと凹状ルートに1パーティー取り付くところだ。我々の他に烏帽子奥壁にはこのパーティーだけだ。南陵はまだ誰もいない。

ひさーしぶりの南陵テラスに着くと、下から例のSパーティーが、南陵目

指して登ってくる。先に行かれては大変と、早速取り付く、我々パーティーは私と、木村、若手の須賀君の三人である。

1ピッチ目 テラスから左に回り込んで登ってみたが、これが以外にヤバイ、冷や汗がでる。Ⅲ+級か？15m

2ピッチ目 チムニー。こんなに悪かった覚えはない。びしょびしょに濡れているからなのか、ピナクルの内側でビレー。Ⅳ級25m

3ピッチ目 Ⅲ+級のフェースだがビレイポイント間がやたらと長くてこわい、25m、此处まで3ピッチに切って登ったが、やっと酔いが醒めて岩登りの勘が戻ってきたようだ。

4ピッチ目 Ⅰ級の草着きの登山道をザイルを引きずって歩く。Ⅲ級40m

5ピッチ目 フェース状を左に大きく巻いてリッジ状を右上、Ⅲ級15m

6ピッチ目 右に回り込んでフェースを直上、明るいリッジを直上。Ⅲ級50m目一杯ザイルを伸ばす。だんだん調子が出てきた。気分爽快。

7ピッチ目 カンテから凹角に入り最後のフェースのと利付きまで40mⅥ級。

8ピッチ目 フェース直上、20m、Ⅴ級。今日最初からこの最後のフェースに登れるかが、ちょっと心配だったが、取り付いてみると全てのピッチの中で此処。ピンはしっかりして間隔が短く、ホールドスタンス共に、よく見ればしっかりとして自由に登ることが出来た。約20年振りの谷川岳は久しぶりに岩登りの楽しさを思い出させてくれた。

下降は6ルンゼを懸垂下降して途中から南稜通しに慎重に懸垂下降して、中央稜の取り付きに行くと、とーくに降りたはずの吉田パーティーが

未だ1ピッチ上にいる。懸垂のザイルが引っかかって登り返したのだそうだ。

二人を待って足取りも軽くテールリッジを下る。出合に着く、出発が遅かったのも、時間も大分押してきているので、早速我が赤帽車で我が家へ向かうものの、到着はかなり遅い時間であった。

谷川岳の3級ルートは未だに、登って楽しい物である事、体調が良ければリードできる事。やっぱり一ノ倉沢は

吾が青春のホームゲレンデである事をあらためて感じ、確認出来ました。

帰りの車の中ではずーっと谷川ズンドコ節が、私の口から流れていたのは、言うまでもありません。一緒に登った木村、須賀に感謝します。

そのうちに感謝の気持ちをこめてお礼をしますので首をながーくして待っていてよ。

(名雪 記)



一ノ倉沢テールリッジ
を懸垂下降する 須賀

初めての谷川岳、谷川岳一ノ倉沢烏帽子奥壁中央稜ルート 2003.7.6

パーティー L 吉田 仁、木南真紀子

7月6日の早朝はあいにくの雨。
あきらめて引き返すハイカーが続々のなか着々と準備を進める先輩方。

新人山行ということで、須賀くんは名雪さんと木村さんに連れられ南稜に。私は吉田さんに中央稜に連れて行って頂きました。

2ピッチ目を右側に回り込み、
4ピッチ目はヒヤヒヤしながら登って行きました。

6ピッチ目を終了した時点で木村さん達が頂上近くにいることを確認して、そこから懸垂で下降。

あと15メートル位で取付に戻れるところまで来たときにロープがひっかかり、吉田さんが登り返して外してくれました。

吉田さんを待っている時に木村さん達が中央稜の取付に到着し、少し待っていてもらい下降。

登ること自体はとても愉しかったですが、自分のロープさばきの解ってなさなど課題の多さが解る山行でした。でも谷川岳はなんだか好きです。

(木南 記)

谷川岳一ノ倉沢烏帽子奥壁凹状岩壁ルート

2003.8.3

パーティー L 吉田 仁、渡辺聡子

谷川三部作は前回同様、リリック調で行こうと思ったけど、だんだんエスカレートしてクラブの品位を疑われそうなのでやめた。

今回は真面目に書こー。

と！ちっとは寝たいから早めに谷田部で落ち合い俺のキャンピングカーで出発！ふつうの配達バンじゃねえーかって声も有るけどそこそこコアな感じで……。

COOL!指定席の便所前に、だれか止めてやがったら引きずり出してケツ蹴飛ばしてやろう思ったけど、しっかり開いていて車を滑り込ませ軽く飲んだくれでシュラフに潜り込む。

朝はまじめに出ました4時出発です！決して遅くないですよ？なのに取り付きに着いてみれば5番目です。マジすか？あんた達早起きし過ぎ。

しょうがないから煙草吸ったりウンコしたりしながら暇を潰す。しかしカンテの時もそうだったけど、なぜか1ルートに集中。今回もみ～んな凹状。カンテがら空きじゃん転戦しろよ。いいルートだよ！そんなこんなであまりに暇すぎて、ほじる鼻糞も無くなった頃やっとな順番が回ってきました。

今回はパートナーから離陸です。目敏い僕は早速核心部の計算。つうことは俺がリードか！フフフ……。ビレイOFFのコールで登り出し、もちつるべだからそのまま2ピッチめに突入～。ここまではカンテと一緒に。そこから凹状の方に突進していく。4ピッチ目は俺、何処でも登って行けそうな

ので、てきとーに登って行くと適当なビレイ点が無くて、てきとーなところで、てきとーにビレイ。これといったホールド、スタンスが無いし、おまけにここで敵と遭遇。最悪……。『渡辺さん、てきとーにゆっくり登って来て～』んでもって、核心に到着。ああ～って感じ、結構ねてるね。取り付いてみると意外に立ってる、けどステミングで傾斜を殺せるからノ～プロブレム。おまけにガッパガバ！楽しいピッチ♪いやもっといいピッチあった！最後のクラック。うすつかぶりで固い岩。1本目のクリップが微妙だったけど後は快適なレイバック最高です。奥多摩辺りの√にあったらアップに最適でしょう。いやあ～凹状、予想以上におもしろかったなあー。

(吉田 記)

谷川岳天神尾根測量登山

2003. 8. 3

パーティー L 本図一統、 菊地光夫

長く続いた雨も上がり谷川岳にも夏がやってきた。今日は会の若い仲間達は一ノ倉沢の凹状岩壁に行った。

私はM氏と2人で一ノ倉岳山頂より肩の小屋までの距離及び方位を測るのが今日の目的だ。

夜遅く警備隊の小屋に着き仮眠を取る。朝一番のロープウェイに乗りゆつくりと歩き始める。

すると後ろより近畿日本ツーリストかどこかのワッペンをつけた団体さんが来て長い列を作る。嘘じゃなくてわかり易く言えば天神尾根の稜線は黒蟻の行列状態だった。

M氏も俺も何十年も谷川に来ているがこんなのはじめてだと言っていた。でも何十年もかよいなれた谷川とはいえこのシーズン、天神尾根を登ることはほとんどない。一ノ倉か幽ノ沢に登攀し、巖剛新道経由での登山をしていた人には、めった

見られない行列だったのかもしれない。

そんな会話をしていると肩の小屋に着き、測定の準備をしてM氏持参のロープを出し、事前にマーカーをつけておいたので一目瞭然だ。まずは、谷川岳に登り、肩の小屋にむかって方位を測る。

次に小屋に向かって距離を測る。周りの登山者が我々を見て不思議な目線をおくっていた。

M氏曰くこの測定の目的は冬の吹雪の時やガスが濃い時には小屋がどこにあるのかわからず以前には何度も苦勞した思い出があり、今後のために役立てようと思い付いたたとの事。

霧が濃いと西黒尾根への下降も迷う事が何度かあったが、誰しも一度や二度は経験しているのではないかな。

目的の測量を無事終えてのんびりと天神尾根をくだっていった。

(菊地 記)



北海道一人旅 羊蹄山

2003. 8. 3

木南真紀子 (単独)

8月1日～8月4日の初北海道旅行をする。

レンタカーを借りて車中泊のままな一人旅。実はそれだけでドキドキ。スリル満点でした。

8月1日は移動日(札幌→ニセコ)約2時間

2日はあいにくの雨のため尻別川でダッキー

3日は薄曇りの中登山。

真狩コースから登る

7時半に出発12時に山頂に着く。
前日から降り続いた雨のため、道はドロドロ。疲れてしまった。

(下記のガイドの記述の通りで) 山登り自体はあまり楽しくない。

「4合目から先は傾斜が非常にきつくなり、ジグザグの道。標高1,600mの8合目からは山頂から南西にのびる尾根を巻き、空沢のガレバを通過する。一部にはロープもあるが、足元には十分注意! 9合目口近くは高山植物が多く見られる。左は避難小屋へ、右は大火口壁のコルへ出る。南東の火口壁は

やせている上に岩場なので要注意。」

ただし、山頂のお鉢周りは愉しく、その頃には天気も回復して絶景でした。

冬は真狩コースと反対の京極コースから下る道がバックカントリーに最適らしいです。是非いつかチャレンジしたいものです。

1時間ほど火口をまわり、13時30分には下山開始、駐車場には3時30分に到着。その足で神威岬にドライブ。

4日目は朝から尻別川でカヤック。

ニセコでのいろんなアウトドア情報はNAC (<http://www.nac-web.com>) というレジャーのお店で教えてもらいました。そこの川遊びが特に面白かったです。今度は冬に是非訪れたいです。

羊蹄山自然公園-20分-羊蹄自然の家-30分-南コブ分岐-3時間-9合目-1時間-羊蹄山山頂予定(計4時間半)

(木南 記)

笛吹川ヌク沢・甲武信岳

2003. 8. 3

パーティー L坂田英希、鈴木 拓

当日午前3時に谷田部の市役所集合。坂田さんの車で常磐道、首都高、中央道と走り、現地には6時前に着いた。

6時出発。しばらく遊歩道のような整備された道を行くと左手にきれいなトイレがあり、さらに少し行くと、沢に橋が架かっていた。

これがヌク沢で手前から入渓した。10分くらい歩くと少し開けたところにでて、ここで登攀用具を装着。ここからは天気も良いし快適な遡行が続いた。

最初のポイントは5mの滝でこれは左からザイルなしで登った。しばらく行くと遡行図（東京周辺の沢、白山書房）にない堰堤がでてきた。これは向かって右側に踏み後を見つけ、この踏み後に付いていったら巻けた。

ヌク沢の遡行では、東京周辺の沢の遡行図に載っていない堰堤が全部で3カ所（多分）あった。

クライマックスは260m3段の滝である。1段目と3段目はノーザイルで登った。2段目はザイルを使用した。これは3ピッチで、坂田さんと私がつるべ式で登った。

1ピッチ目は私のリードから。多数のハーケンが打っており、ランニングビレーは容易に取れた。

2ピッチ目は坂田さん。下から見ると、滝の水をまともに浴びて苦しそうである。

3ピッチ目はまた私。出だしが難しく、ここで時間をとられてしまった。この大滝を越したら後はぬめと小滝が続いた。

水がかなり細くなった頃、右手に入っていく踏み後を見つけた。これを

追っていくと、30分程度で甲武信岳と破風山を結ぶ登山道にでた（ここで12時半）。時間もあることだし、甲武信岳山頂まで行くことにした。

最後の登りはきつかったが、山頂に着いたときには爽快だった（1時半）。午後2時に山頂を後にして、延々と下った（戸渡尾根―近丸新道）。駐車場に着いたのは夕方5時半。

温泉に入って中央道にのると、大渋滞。夏休みと日曜日が重なったせいだろう。あまりに混んでいたので、下道はどうかと言うことになって、上野原でいったん下りたが、下も渋滞。

腹が減ったので、最初に見つけたラーメン屋に飛び込んだが、これがまたまずいラーメン屋だった（名前は忘れた）。大体、カレーとかラーメンのようなありふれたメニューは、普通に作れば普通においしくなるように思うが、敢えて不味く作ったように感じられる店がたまにある。不思議である。不味いラーメンを食べた後、相模湖で再び中央道にのった。そんなこんなで谷田部着は深夜0時過ぎだった。

今回の沢はガイドブックで激賞されており期待して行ったが、その期待を裏切らないすばらしい沢だった。特に3段の滝では適度なスリルがあるクライムシャワーが味わえ、天気さえよければ、とても気持ちのよい遡行を楽しめると思う。

（鈴木 記）

那須井戸沢

2003. 8. 10

パーティー

L木村 一、笹平

孝、吉田 仁、木南真紀子

前日の上曜日は台風の影響で雨風が強く井戸沢の遡行は諦めようと思った程だ。しかし、夕方からは雨も上がり回復の兆しが見えていたので現地に行こうと言う事になり、つくば市役所に集合して出発。板室温泉から深山ダムまでの道路には木々の枝が散乱しているので白湯山林道終点までは車で乗り入れを躊躇ってしまい、深山ダム周辺で車の中で小宴会後仮眠。

翌朝多少風が強いが青空も見えているので今日も快適な遡行が出来るだろう。

ここ井戸沢は1ヶ月前に木村、坂田、鈴木、菊地の4名で訪れているが、入山路を間違えてしまったのと雨の為に敗退した事がある因縁の溪だ。

白湯山林道終点には数台の車が止まっており、遅く来ると駐車スペースが無くなってしまう恐れがある。

ここから三斗小屋宿跡経由で井戸沢出合いまでは約1時間を要した。

井戸沢の出合いは伏流になっている筈だが、昨日の台風の影響で今日は水が流れている。これは多少楽しめるかなと内心嬉しくなってしまう。

最初に現れる15m末広りの滝までくると先行パーティーがいるので順番を待って右のブッシュ付リッジに取り付く。ザイル無しで登ってしまったが後続は安全の為にザイルを使用して登ってもらう。

この15m末広りの滝の上で流れが90度左に曲がり、上部のナメ滝の所で先行パーティーに追いついてしまったので先行させて頂いたが、なん

と先行パーティーは茨城の府中山好会の岡村さん達だった。

ここからは快適なナメ滝が連続して現れるので面白い沢だ。途中お助け紐を使用したり、巻道を登り過ぎて懸垂下降したりと楽しんで遡行する。

二俣の手前に稜線を望める快適な場所があったので大休止していると、岡村さんパーティーが下から登ってきたので少し話を交わす。

ここ井戸沢は明るく開けた快適な沢なので初めて沢登りをする人が訪れると、沢登りの魅力に虜になってしまうかも知れないような溪だ。

二俣から上部は右俣に入り快適に遡行すると、突然大岩が沢を塞いでいる所に出る。いつもなら水流が枯れる頃だが、昨日の台風の影響で今日は稜線直下まで水流があった。

稜線に出て小休止していると赤トンボの群れが飛んできて舞っているではないか！。まだ盛夏なのに2000m近くは既に秋の気配が漂っている。

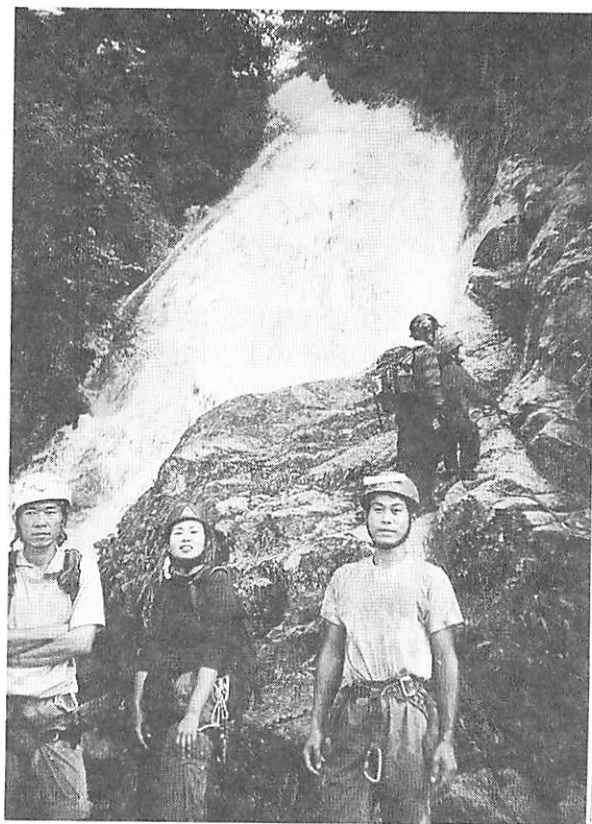
トンボ採りに興じていると子供の頃の懐かしい思い出が蘇ってきた。45年以上前の純な子供の頃には夏休みにはセミ採り・トンボ採り・川遊びくらいしか遊ぶ事がなく、貧しかったが楽しい子供時代だった。今沢登りに夢中になっているのはその延長かなと思う。

休憩後、流石山の越えて大峠に向かうが、この辺りの斜面は山スキーには美味しそうな傾斜では是非一度はシュプールを刻んで見たい斜面だ。大峠からは三斗小屋温泉には寄らず近道を下ると藪の中で野猿の群れに遭遇し

たが、小さな群れだったので問題なくスルー。途中タマゴ茸を探しながら下山するが今年はキノコは不作なのか1本も見つからなかった。

(木村 記)

那須 井戸沢F1をバックに
吉田、木南、笹平



ヌク沢の滝をリードする鈴木

剣岳ハッ峰六峰Aフェース

2003. 8. 15

パーティー L 吉田 仁、坂田英希、鈴木 拓

それは鮮烈なる連なりであったかといえは意外とそうでもなく、だんだんとそれが近づいてきた、そんな感覚の出逢いでした。

視界が開けた雪渓を地味に、地味に登していくのですからそのように感じたのでしょうか。

整列する峰を端から数えるとA・B・C・Dと、とても行儀がよろしく思わず微笑んでしまう程。ただし、内気な二番目の峰だけは、近くで覗き込まなければ望めません。そんな峰の性質を垣間見るにつけ、好感を持つのは言うまでもありません。

愛着を感じつつもようやくここまでたどり着いた安堵を飲み込み身支度をしたならそろそろと登攀と相成ります。

天気も上々、少し濡れた岩にもめげずこの日和になったことを素直に喜ぼう。この爽快な一日に痛快なる峰峰。否がおうにも期待は高まります。

Cフェースを終え、5・6の科尔へと懸垂下降。

5・6の科尔は、一仕事終えた後のちょうどいい一服の場所となっています。この場所で口々に今の登攀を語り、笑い、次の一本に期待を寄せてまた笑うのでした。

『ときを忘れるとき』
大人になればなるほど失ってしまったようにも感じます。

いつの間にやら夕日に染まった少年時代を思い出すように Aフェースの登りに取り掛かります。

出だしの1ピッチ目、カンテからハング右を越えていくのが核心です。時をも忘れ、一心に次の一手を探します。程よい緊張感がたまりません。

天候も陽の射す日和となり、ますますフリクションが利いてきて残りのピッチは爽快な登攀を楽ませていただきました。

Aフェースのカシラからは視界の広がった長次郎雪渓の眺めを堪能し懸垂で5・6科尔へと下降します。科尔では装備を解きながらの語りはまでも笑顔で満たされます。

ザレガレの斜面を下り、雪渓をおもいおもいに下っていくと次第に冷気のカシラに包まれ、寂しげになるとともに先ほどまでの充実感が一転、名残惜しさに変わっていくようでした。

と、感傷的になるのもつかの間。

真砂沢ベースでの大宴会。

次から次へと出るわ出るわ。おなかイッパイです。

東京の皆様。ごちそうさまでした。

(坂田 記)

剣岳八ッ峰六峰Cフェース（剣稜会ルート）

2003. 8. 15

パーティー L 吉田 仁、坂田英希、鈴木 拓

せっかく剣まで来たのに、前日は停滞した。今日を逃したら、登坂できずにつくばに帰ることになるだろう。ということで、午前3時に起床した段階で、多少雲行きは怪しかったが、六峰に出發。結局、出發してから帰るまで雨は降らなかった。

雪渓は急で、持ってきた軽アイゼンでは不安であった。不安だなあ、大丈夫かなあ、と言っていたら木村さんが12本歯のアイゼンを貸してくれた（恐縮&感謝）。

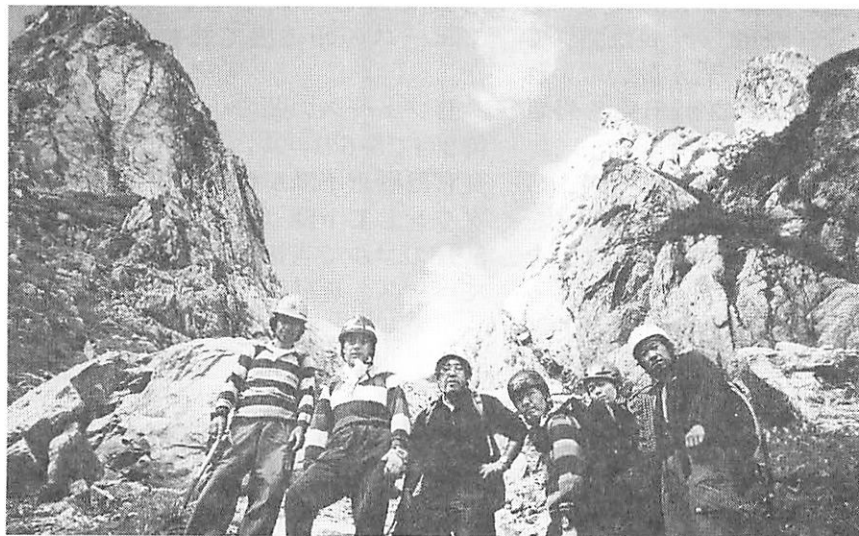
真砂のテント場から2時間余りを取り付きに着いた。登攀はすべてのピッチで吉田さんがトップ、私と坂田さんがフォロー。その後、終了点までの記憶は余りない。少なくとも、記録性のある文章を書けるほどの記憶はない。

まあ、この登攀から半年後の今、山行

報告を書いていることに一番の原因があるわけだが。ただ、本番のアルパインはこれが初めてで、付いて行くの一杯一杯だったということもある。

剣稜会ルートに関して、鮮明に覚えているのは次の2つの光景だ。一つは、リッジを掴んでのトラバース。目の前がすばっと切り落ちていて、爽快な高度感を感じたことを覚えている。もう一つは、我々の後続パーティーが起こした大きな落石である。登攀しているときに、どうも落ちそうだなと思った大きな岩があった。落石はこの岩だと思われるが、所々に当たり砕けながら落ちていく岩を見て、誰かに当たったら大変なことになるんじゃないかと冷や冷やした。何事もなく本当によかった。

（鈴木 記）



剣岳八ッ峰5・6のCOLをバックに

松原、名雪、金沢、坂田、鈴木、吉田

剣岳八ッ峰六峰Aフェース&Bフェース

2003. 8. 15

パーティー L木村 一、名雪博二、金沢 清、松原丈夫 (ACC-J 東京)

『あ・ザイル忘れた』すかさず『バカ』『マヌケ』『ドジ』と怒号が飛び交う。八ッ峰六峰Aフェースの取付での出来事。

当初の計画では名雪・松原パーティーと木村、金沢パーティーの2パーティーに分かれて登攀する予定だったが、清ちゃんが冒頭の『あ・ザイル忘れた』の言葉を発した。更にクライミングシューズが無いとまで言い始めたが、シューズはザックの底から出てきたので、変則的にザイルを結び名雪トップでAフェースに取付く事にした。

登攀用具を身に付け準備していると、下から見覚えのある顔が登ってきた。以前当会に所属していたOさんがパートナーと一緒にAフェースを登りに来たとの事。

今日で剣岳にきて4日目と言っていたが、登攀できたのは1日だけだったらしい。Aフェースの1ピッチ目は濡れていて嫌らしかったが、岩が乾いていれば快適なクライミングが出来る岩質だ。

2ピッチ目からはBフェース、Cフェースが一望に出来、Cフェースを登攀中の吉田、坂田、鈴木パーティーを見ることが出来た。2ピッチ目、3ピッチ目は何と言うこともなくすんなり登攀し、Aフェースの頭で大休止。写真を撮りバカを言って笑っているが、これが清ちゃんとの最後の山行になるとは、この時には想像もつかなかった。

ここから見るBフェースがエラク立っているように見えて格好がよかったので、次はBフェースにしようとするなり決定。Aフェースの頭からは懸垂下降1回で5・6のホルに降り立ち、こ

こで吉田パーティーの下降を待つ。小休止後吉田パーティーはCフェースへ、我々はBフェースへ向かった。

Bフェースは未だ濡れていたが1ピッチ目はホールドスタンスが豊富なので快適にこなす。2ピッチ目は2級+のピッチとの事なので松原社長がトップで登る事になった。しかし、下から見えていると難しそうに登っているではないか!!。

カンテを回り込む所などは体が空間に飛び出している始末。『社長格好良いよ』と野次が入る。『やはり昔取ったきつねウドンは上手かった』など訳の分らない事を言っている内に自分の番がきたので登り始めると、先程松原社長が格好良く登っていたカンテは快適なピッチだ。Aフェースの吉田パーティーが写真を撮ってくれないかなと思って攀じているとひょっこりBフェースの頭に出て終わってしまった。

Bフェースの頭で小休止後、懸垂下降2回で5・6のホルに降り立つが、名雪長官は懸垂下降が嫌いなのでクライムダウンして下降(若いね名雪さん)。5・6のホルで吉田パーティーと合流してベースの真砂沢に帰幕。

(木村 記)

黒谷川小幽沢

2003. 8. 15～8. 16

パーティー L 菊地光夫、鯉河仁志、須賀泰司

夏休みは会社によって長さや規約が多少違うが、一流会社の社員は1年の3分の1が休み、公務員の〇〇さんは最大で40日毎年30日はしっかりと休みを取るとの事。

そこへ行くと しがなない我々サラリーマンは夏休みなんか3日間しかなく、好きな時に取れとの事なので、アグリカルチャーの鯉川さんとどこか楽しめる沢ないかなー。

発売したばかりの山溪に眼を通しているとふと黒谷川小幽沢の記録が載っているではないですか。この辺りは以前より興味があったので、お盆に行くことにする。

鯉川さんの近所は年寄りばかりで、毎年新盆が20件からあるそうです。都会にお住まいの方は想像つかないでしょう。

忙しい合間を見て山の準備して下界より逃げ出してきたとの事。彼曰く山は天国だー。

夜遅く林道の奥まで入ろうと思ったが手前の入口に鎖がかかっており近くの空き地にて仮眠。早朝起きると雨が降っており気分もグレーになるが、気を取り直して林道を詰める。入口の鎖は入漁券の販売所だったと思われる。小幽沢橋を渡りウグイス橋のところより入溪。

そのころより雨もやみどころにかこうにか天気の方も、持ってくれそうなので、急いで支度をして入溪。ちょっといくと、最初に小幽沢堰堤があり辺りをキョロキョロしてみるとなんとウスヒラタケが倒木にびしりと生えているではありませんか。山の恵みと思いま

ずはゲット。

沢は容易でポンポンと進む。すると

またもや、倒木があり今度はそれは見事なキクラゲがあるではありませんか。これも山の恵みとゲット。メンバーの須賀君は目を丸くしてキツネにでもつままれたような顔をしていた。秋でもないのにキノコがガッポリ今夜みんな食ってしまうぞ。鯉川さんは竿を出して振って見ると早速当たりがあり、山の恵みと思いゲット！から焼きにして骨酒にいいあんばいかな。

すると3分の1ぐらい行くとゼンマイ小屋跡がありまわりは以前は生活をしていたので平地になっているが小屋はなかった。この辺より左右から数本の沢が入込み、会津特有の形になり谷が深く、切り立っている。でも遡行はむずかしくなくノーザイルで進むことができその点では初心者向きな沢だ。

だんだんと高度を上げていくと左右の稜線がはっきりと分かり会津朝日岳が雲にかくれてハッキリとは見えないがかすかに分かる。

更にどんどんと進むと朝日沢とオオモチバ沢の二俣に着く。

沢もだんだんと水量がすくなくなり、夏の終わりに近いお盆の頃だと言うのに雪溪があり、周りには春遅しとウドとかフキがあり、いかにこの辺は谷が深いかがわかる。

天気の方も今までは何とか持っていてくれたが、とうとう雨が少し降り始めてきてしまい空にも雨雲がかかり暗くなり始める。

沢もほとんど詰めたと言うことで、これより下降とする。鯉川さんは今夜の餌にと竿をだしてみるが全然あたりはなくガッカリ。夕方より只見の公園の東屋でそれなりのキャンプができ非常にたのしかった。

(菊地 記)

武甲山橋立川

2003. 8. 24

パーティー L本図一統、渡辺聡子

武甲山といえば22～23歳のころ※松原と来たことがある。当時、秩父登攀会というクラブが幕岩にルートを開拓したということで、山岳雑誌に紹介されていたのを見て登りにきたのだった。

幕岩は垂直の壁とハングで構成されており、食指を動かされたのである。武甲山はその頃から石灰岩採掘が行われており、幕岩がなかなか見つからず、やっと取付に着いたときには時間切れになっていた。でも正直のところ、一度この壁を見たら二度と行きたいという気にはならなかった。それだけ魅力的な壁ではなかったということである。

その後、秩父方面に来るたびに、頂上に一度は登ってみたいと思っていた。それは、その立派な山容が、秩父の、いや関東の名山といってもいいような姿であるからだ。しかし、山肌は傷だらけで昔の面影など微塵もなくなってしまった。悲しいかな頂上の高さも数十m低くなったと聞く。

今回の山行も、私の足のリハビリ山行という性格のもので、渡辺さんがわたしに付き合ってくれての山行なのである。

前夜、三峰方面のボルダー&沢登りに行く笹平パーティと、近くの道の駅で一緒に宴会をやろうとしたら、向こうのパーティは夜のうちに登山口まで行くとの事。旨い物をたくさん用意していたのに笹平パーティご一行様残念でしたね。

しょうがないので二人で食いきれ

ないほどの超ゴウカ料理で宴会をする。少し太ってしまったかも？

明けて当日は快晴の暑くなりそうな天気。橋立川からといっても、今回の目的は沢登りではなく、あくまでも歩くのが目的である。登山道を歩くのだけではつまらないので、変化を持たせたという事である。

リハビリ山行にお付き合いいただき渡辺さんへのせめてもの恩返しにと、ハーケンおよびボルトの打つ訓練をすることにした。

沢に入るとまもなく15m滝が現れる。ガイドブックによると、この滝を登らなかったら後はなにもないようなので直登することにした。途中まで登るも出口が少しいやらしいので、ロープを1ポイント使用した。

すぐに沢は終わってしまいそうな溪相なので、早速訓練を始める。ボルトは打つまねごとではなく、穴をあけて実際に打つ。そして、効いたかどうかを確かめる方法を覚えてもらおう。ハーケンはリスの探し方とか、実践での打ち方、抜き方などを勉強した。

より良い場所を求めて上に移動するも、ゴーロになってしまったので、露岩で再びボルトの練習をする。

エアリアマップで方向を定め、稜線に向かう。水が近くになると途端に暑さが堪えてくる。ほうほうの体でやっとこさ稜線に這い上がる。予定のシラジクボより少し右手に出た。

暑くて暑くてへろへろになり、と

でも渡辺さんにはついて行けなかった。十字路で小休止後、御嶽神社のわきを通り頂上に立つ。もともと頂上はここではなく、別なところにあったが削り取られたため、この場所に変更になったらしい。足元は採掘場が無残な姿であるが、景色は秩父盆地が一望に眺められて非常に良かった。

記念撮影を一枚撮ったらフィルムが無くなってしまったので、私の記念写真は無い。もうくることはないような気がするので残念な気持ちがした。

帰りは長者屋敷尾根を下る。さすが石灰岩採掘の山だけあって、所どころに発破の際の避難小屋が作っており、物好きの私は一度避難してみたいと思った。こんなに暑いのにハイカーは結構いるもので、登ってくる人が何人

もいた。

どこか岩場でもあったらネイリングの練習をもう少しやろうと考えていたが、まったくないうちに登山口に到着してしまった。

最後は渡辺さん特製のソーメンを腹いっぱい食べて帰路についた。あとで分った事だが、笹平パーティはすごい雨に降られたそうである。私たちは雨に遭わずに帰れた。これは口ごろの行いの違いであろう。

(本図 記)

※松原は、12月10日、仕事中に1~2mの高さから転落、頭蓋骨骨折と脳挫傷で意識不明の重体となっています。一日も早い回復を祈っております。

両神金山沢

2003. 8. 24

パーティー L 笹平 孝、吉田 仁、木南真紀子

8月24日に笹平・吉田・木南で両神山・金山沢を登って来ました。

もちろん山慣れた先輩方に連れて行って頂けるとなんの下調べもせず、へらへらとしていたところ、笹平先輩と吉田先輩の目がキラリと光り、沢のルート図を手渡され、「後ついて行くからよろしく」とのお達しでした。

気分は一気にとほほほーと上落合橋(8:00)のたもとをスタートしました。最初の滝を越えるところから沢は落ち葉でいっぱいでした。めちゃめちゃナメの沢にどろどろの落ち葉、私はひいひい一落ちる滑る転ぶとよろよろしていると涼しい顔で二人の先輩はひよいひよいと私を抜いていきました。ここで、私のトップは終わってしまいました。

申し訳ありませんが、沢の中は転びたくない以外のことは記憶にございません。

最後の沢のつめ近くは判りにくく、また寄り道することに快感を覚えてらっしゃる先輩方がにやにやしながら私にルートを尋ねるので、真顔の勘で右と答えたところ。要望通り道に迷うことができました。結局、稜線にでるのに1時間くらいかかりながらも両神山山頂(12:30)に着きました。

下調べもしてない上に迷ったので私にはどのようなルートで行ったか判りません。

上落合橋ー金山沢左俣[八丁沢]ー竜頭山・東岳間の稜線ー東岳ー両神山(剣ヶ峰)ー金山沢右俣左沢右岸の登山道ー落合橋登山口

(木南 記)

奥多摩水根沢

2003. 8. 31

パーティー L 本図一統、木村 一、菊地光夫、笹平 孝、吉田 仁、
渡辺聡子、木南真紀子、鈴木 拓、須賀泰司、
松原丈夫 (ACC-J東京)、小笠原 剛 (会員外)

沢&ボルダリングに行こうという提案が笹平さんから流れてきました。今までフリークライミングには興味を示さなかった笹平さんですが先週のボルダリングが楽しかったのでしょうか。

どうもこの夏は雨ばかり降っていますし、暑い日も少ないようです。お盆の岩登りも全然だめでしたし、沢登りもどんよりした天気の中での遡行が多かったように思います。

今回も山にはガスがかかり沢の中は薄暗くやな感じです。水根沢は水量豊富、釜あり滝ありの沢なので、本来の夏ならば積極的にじゃぶじゃぶと水に入って釜を泳ぎ、シャワークライムをするところなのですが、こんな天気ではとてもやる気がおきません。

濡れないように、水しぶきを浴びないようにと進んでいく我らでしたが、沢登りひさしぶりの本図さん、クラブに入って最初の夏の木南さん、須賀君だけは別でした。びしょ濡れになりながら果敢に水に突入して行きます。

さすがです。若いっていいな、うらやましいな、などとばばくさい言葉がついつい出てしまいます。

次々とでてくる滝や釜を超えるとやがてわさび田と作業小屋が見えてきて、さらに進むと遡行終了を告げる半円の滝が現れます。本日のクライマックスの滝ですね、見事な滝でした。手足を突っ張って登っていくのですが、これまで濡れないように心がけてきたのに、不覚にもウォーターライダーを楽しんでしまいました。

あ〜あ。その後仕事道を通って駐車場に戻り、気を取り直してボルダリングと思ったのですが、目的の場所にたどりつけはしたものの岩の下の方が水の中に沈んでおりこちらは断念して戻ってきました。

水根沢は短すぎるような気もしますが、沢登りの楽しみがぎゅっとつまっており、今度は太陽が照りつける時に心ゆくまで泳ぎに来てもいいかな〜。

(渡辺 記)



水根沢で水と戯れる
本図

那須 阿武隈川南沢

2003. 9. 7

パーティー L木村 一、笹平 孝、吉田 仁、木南真紀子、須賀泰司

最初の予定では一里塚沢を遡行する予定でしたが午後から天気が変わる予測なので、下降が比較的楽な南沢に変更したが、甲子山に直接突き上げる南沢はこの周辺では魅力的な沢だ。

メンバーは1ヶ月前に同じ那須連峰の井戸沢を遡行した、笹平、吉田、木南、木村の4名。甲子温泉付近の駐車場に車を止めて準備をしていると、地元の岳人が多数集まってきて同じように沢登りの準備をしている。『どこに行くのかな?』『南沢でなければいいな~』と思いながら、一足先に出発して阿武隈本流に降り立った。

しかし、やはり地元の岳人は近道を知っている所以我々より前に南沢の出会いに着いていた。誰かが挨拶している様子を横目で見ると人数は更に増えて12~13人はいただろうか、『やっぱり南沢か』と思いながら順番待ちは嫌なので休憩もしないで南沢に入っていた。

F1を快適に登り、続くF2をザイルを出して右壁を登攀中に後続パーティーが追いついてきて、F2を右から巻いて登り始めた。やはり人数が多いため時間を要しているのでF2上で再び先行して快適に遡行をするが、ここ南沢は快適に直登出来る滝が多いので遡行していて楽しい沢だ。

二俣で大休止して更に上部を目指す。後続パーティーはまだ姿を見せない。本流の右俣に入り進むと目前に大滝がドーンと現れてきた。ホールドが豊富なのでザイルを出さなくて取り付いたが、右にトラバースする付近からザイルを出してカンテ状の所を快適に

登り大滝を足下にした。

奥の二俣付近までくるとガスが掛かり始めたが、なんとかガスが持ってくれば良いなと思いながら奥の二俣を左俣に入っていた。

最後は若干のヤブ漕ぎで登山道に出て約10分程で甲子山の山頂に着いた。誰もいない山頂で身支度を整い、行動食を食べながら周りを見渡すが、1時間後位にはポツポツときそうな気配である。

ここからは何度も下っているのでキノコでもないかと周りを探しながら下るが、目ぼしいキノコは全然見当たらない。そう言いいば南沢のF2を登っている時に籠を腰に下げたキノコ採りと思いき地元の人が付近の山に入っていくのを見たが、後で温泉に入った時に聞いたらこの辺でも舞茸が採れるとの事。

甲子温泉に着く頃には雨が降り出し、更に下の新甲子温泉温泉で風呂に入る頃には本降りになっていた。今回は南沢で正解!!

実は2日前に55歳になったばかりだが、まだまだ登りたい山、遡行したい沢、滑りたい山が沢山ある。これから素晴らしい仲間と共に登れればと心から願うばかりだ。

(木村 記)

東黒沢～ナルミズ沢

2003. 9. 15～9. 16

パーティー L 木村 一、本図一統、渡辺聡子、鈴木 拓、木南真紀子
名雪博二 (ACC-J 東京)、松原丈夫 (ACC-J 東京)

「行けば登れましたかね？」

「どうかなあ？」

「気になりますね」

「うん、でも中止にしたってことは、それだけモチが下がってたってことだよ」

「中止にしてから何回も天気予報見ちゃいましたよ」

「俺だっておんなじだよ」

これは、現地に向かう車の中での、諦めきれない私と渡辺さんの会話である。予定では唐沢岳幕岩に行くはずだったが、そちらの天気予報が悪く中止、急遽このパーティーに入れてもらったのである。

私はまだ長い距離を歩くのは不安も多かったが、みなさんがそのときはサポートするからと言ってくれるので、お言葉に甘えて参加させてもらうことにした。

湯桧曾の集合場所に着くと名雪氏と松原氏はすでにできあがっていた。雨が降っており明日の天気が心配である。

14日、曇り後晴。天気も回復してきたので予定のルートで行くことにした。

東黒沢に入ると、人気ルートだけあって人がたくさんいた。別に困難なところもなく進んでいくと3人パーティーが休んでおり、単独の人に何やら教えている。それを聞いた単独の人は右の沢に入っていた。私が地図を確認すると、そこは真っすぐに行かなければいけないはずなのに……。でも右を登る目的で来ているかも知れないので、余計な節介はやめておくことにした。

やがてコルに出たので、反対側のウツボギ沢を下降すると簡単に広川原に出られた。ここからナルミズ沢を遡行していくも、別に悪場もなくちょっと単調に感じられた。それに人が多くてイヤになる。

魚止滝の少し上にいい幕場があったのでビバークとした。松原氏が尺上(33センチ)のイワナを釣った。尺上は初めてでたいそう喜んでいて。みんなで記念撮影をする。

今回の食料は東京方式で、各自自分の分は自分で用意するというもの。だから全員食べるものが違う。実際はあげたりもらったりするので、和気あいあいとしたものだが、やはり私は全員同じ釜の飯を食うのが好きだ。

自分の考え方が古いのかも知れない。東京方式だからこそ、私みたいな急な参加も可能である利点もあることはあるのが……。

まあ、急にメンバーに入れてもらってこんなこと言えた義理ではないけど。

25日、曇り後雨後晴。二俣を右に入り稜線に向かう。このころより雨が強くなってきた。天気良ければ美しい草原なのだろうが今日は何も見えない。稜線に出たら後は歩くだけ。もくもくと歩く。白毛門まで来ると、天気も回復してきて日も差すようになってきたが、やはり人が多くて自分好みの山頂ではなかった。

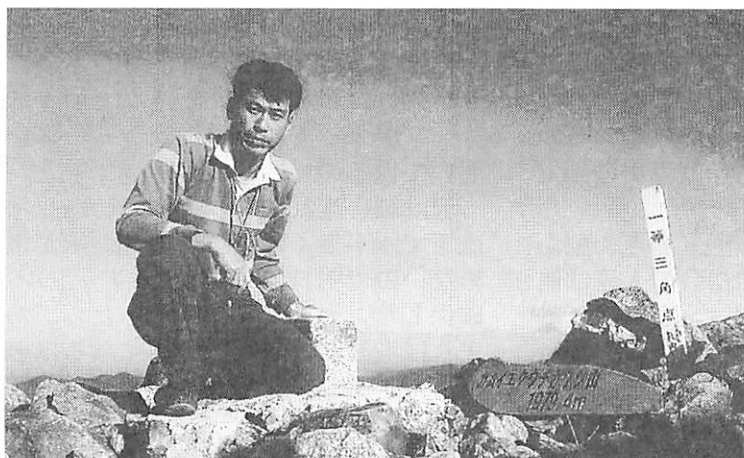
膝の手術をしてから初めての長い歩きで不安だったが、痛み止め薬を飲みながらも何とか歩いて良かった。
(本図 記)



南沢の釜をへつる 吉田、木南、須賀、笹平



東黒沢のナメを行く 本図、鈴木



カムイエクウチカウシ頂上での笹平

北海道

カムイエクウチカウシ山～エサオマントッタベツ岳

2003. 9. 15～9. 17

パーティー L 笹平 孝 (単独)

大洗からフェリーに乗り、9月12日の昼に苫小牧に着いた。台風が北海道に向かって接近しているので、明日から天気が崩れるようだ。明日はカムエクに行っても雨で登れないので、まだ天気が良い道北方面のクワウンナイ川に予定を変更して車を走らせた。

天人峡の駐車場で一泊し、まだ薄暗い中、出発の準備にかかる。昼頃から雨が降る予報なので、昼までに核心部を抜け夜の20時には駐車場に戻る予定にする。しかし、出発した途端に雨が降り出し中止となった。今回の北海道はカムエクが本命なので、ここにいってしまうのがない。中札内へ向かう。

カムエクの登山口である7の沢駐車場までは、8月の台風による土砂崩れのため、札内ヒュッテの所にあるゲートが閉まっていた。北海道へ出発する前に電話で聞いていたので特に問題はなかったが、札内ヒュッテでゲートが閉まっている事を知らずに来てあきらめて帰った人が何名かいた。

札内ヒュッテの中を覗くと、静内山岳会の人達が大勢集まり昼から宴会モードになっている。この連休中に、コイカクから1839峰の予定だったそう。雨は相変わらず強く降っているので、みんなと一緒に酒を飲み山の話で盛り上がった。

翌日、台風が明け方通り過ぎ、朝から快晴になる。静内山岳会の人達は他の山に転進するそうだ。うどんをご馳走になったり、行動食をいっぱい貰ったり大変お世話になった。前を流れる札内川は増水しているので、今日はこ

こで停滞となる。

9/15 札内川はまだ少し濁り完全には引いてない様だが、天気が良いのでとりあえず出発する。札内ヒュッテからは7の沢出合までの9kmを歩いて行く。7の沢出合で道路が無くなると思い込んでどんどん歩いてたら通り過ぎてしまい、あわてて結構な距離を引き返す。

7の沢出合から沢に降りて札内川を遡行して行く。7の沢出合から右岸沿いに所々テープががあり、途中で膝上の厳しい渡渉が4回くらいある。獣道を利用しながら8の沢出合に着くと、8の沢を少し上がった所には広いテシがある。大雨が降った直後なので当然誰もいない。ここから8の沢沿いには、しっかりした道があり歩きやすい。

沢は上部から直線的に流れているのが良く見える。やがて、滝が三本合流している三俣が現れる。この滝はどこを登るんだろうか不安になるが、近づいてみると正面の滝に高巻く道がしっかりとあった。ここから急登が始まり、濡れた岩のトラバースなど所々にロープが張ってあるが、沢シューズを履いているので問題なく通過できた。

沢は細い流れになり、8の沢カール直下で水が無くなる。この先、水が汲めないので明日の分も含め3リットル確保した。ついでに頭も洗ったら、あまりにも冷たい水なので痛くなるほどだった。そして、憶れていた8の沢カールに到着する。

岩の上に荷物を広げ、のんびり風景を眺めながら1時間休憩し、そろそろ出発するかと思ったら単独の人が登ってきた。今日はカムエク頂上で泊まり、明日コイカク経由で下山するそうだ。8のカールの中央には、ここで熊に襲われて亡くなった三名の慰霊碑ある。

この先は、カールからピラミッドピークのコルへ向けて登って行く。稜線に出るとカムエクよりもピラミッドピークの方が、かっこよく見える。稜線上を登って行くと、カムエク頂上から10メートル下がった所には6張りくらい張れるテン場がある。頂上で大パノラマを見た後、ここにテントを張った。近くにはコケモモやガンコウランやクロマメがぎっしりで、丁度食べごろだ。

9/16 今日快晴のようだ。ここから北に延びる稜線の遥か遠くにエサオマンは見える。一日でカムエクからエサオマンを歩いた記録があまり無いので、気合を入れて出発する。稜線は悲しくなるほどアップダウンが激しい。250メートル一気に下がり、200メートル一気に登る。これを繰り返しながら進んで行く。各ピークにはテン場があり、ナメワッカ分岐まではしっかりした歩きやすい道が続く。ナメワッカ分岐から先は、急に道がハイマツに覆われてうっとうしくなりだす。ハイマツが低い所では、意外と道から外れた方が歩きやすかったりもした。

今回、エサオマン近くの札内分岐から沢筋を降りようと思っていたが、実際に見ると悪そうなので10.5の沢を降りる事にする。10.5の沢上部の稜線にザックをデポし、ここからエサオマンに向かう。だんだんハイマツが高く覆われてきて歩き難くなる。小高いピークを越えるとハイマツ地帯の稜線上か

ら離れ、東側に一段下がった所に道は続き笹藪のトラバースとなる。ふたたび稜線に戻ると、それほどハイマツも無く歩きやすい道になる。札内分岐まで来ればエサオマンは目の前だ。一度下がってから急斜面を登り返すと、やっとエサオマン頂上に到着する。

後は、今登って来た道に戻るだけだ。今までハイペースでかなり疲れが出てきていたので、ザックをデポした所まで戻るのが時間が掛かった。まだ時間があったので、これから10.5の沢を降りる事にする。せっかく背負ってきたビールを下に降ろすのもしゃくなので、ここで一気に飲んでから降り始めた。ビールを飲んで大失敗、沢靴に履き替えたこともあり草の上はよく滑る。スッテンコロリ、しりもち付きまくりで降りるというより滑り落ちて行く、そのたびに必死になって手で草を掴んで止めた。疲れた体にビールは危険。

10.5の沢は何ヶ所か巻いて降りる所が出てくるが、大きな滝は無くロープは必要ない。10の沢と合流すると10の沢出合まであと少しだ。10の沢出合からはテン場を探しながら札内川を下ると、200メートルくらい行った所で何とか張れそうな場所を見つけた。もう暗くなるので急いで釣りをやるが、残念ながら何も釣れなかった。焚き火と酒があればそれで十分だ。

9/17 札内川を下ると、台風で沢が増水し岸が削られた為、沢に木が倒れている光景をよく見る。9の沢出合には良いテン場があり、近くに熊の足跡もある。記念沢を過ぎると雨量計の建物がひっそりと建っていた。沢が開けて明るくなると8の沢出

合に到着した。本来ならここから7の沢出合まで行けば車に戻れるので気が楽になるのだが、札内ヒュッテまで歩くとなると、そんな気にはとてもなれない。8の沢出合からは獣道が所々あるので歩きやすい。7の沢出合に着くと荷物を放り投げ、沢で水浴びをする。ハードに歩いたせいで両足の豆がつぶれてひどい状態になっていた。ここまで来れば後は道路なので気が楽だが、痛い足をさらにむちを打つかのように札内ヒュッテまでの9kmを歩く。

9/15 札内ヒュッテ (5:00) -7の沢出合 (7:10) -8の沢出合 (8:40) -8の沢カール (12:30~13:50) -カムエク頂上 (15:30)
9/16 カムエク頂上 (6:00) -ナメワッカ分岐 (11:00) -札内分岐 (13:20) -エサオマン頂上 (14:10) -10.5の沢のコル (15:50) -10の沢出合 (17:40)
9/17 10の沢出合 (8:00) -9の沢出合 (9:10) -8の沢出合 (10:10) -7の沢出合 (11:40) -札内ヒュッテ (13:50)

(笹平 記)

北海道

サシルイ川～羅臼平

2003. 9. 21

パーティー L 笹平 孝、他1名

9月19日に羅臼キャンプ場に来たら、ヘリコプターが飛んでいる。山に入って遭難した人がいるので警察が捜索していた。遭難してからもう一週間になるらしい。明日から自衛隊が出動するみたいだ。

地元の知り合いの家に行き、サシルイ川に誘ってみる。明日行こうと思ったが、夜中に雨が降るのでサシルイ川も多少増水するだろうから、あさっての21日に決定した。

20日は知り合いのシーカヤックを出して、相泊から観音岩まで遊びに行った。漕ぐのが慣れてないので、遅れてどんどん離されてしまう。観音岩までは1時間くらいで着き、腕がパンパンになる。帰りは向かい風だったのでえらく苦労した。おかげで、左腕が使い物にならなくなった。近くにある無料の相泊温泉で汗を流して行く。羅臼

キャンプ場に戻ると、自衛隊のヘリがサシルイ川で遭難者を無事発見したそうだった。

9/21 朝の5時には出発する予定だったのに寝すぎて5時半に起き、急いで支度をしてサシルイ川へ向かった。橋の所に駐車場があり、ここに車を止めて出発する。河口からすぐ上にある堰堤までの間には、カラフトマスがうじゃうじゃ遡上していた。

サシルイ川はそれほど水量が多くない川なので、渡渉はどこでも楽に行ける。日高の沢よりも知床の沢の方が鹿が多いので、獣道がしっかりしていて歩きやすい。二つ目の二俣で右がサシルイ川、左が海豊川に分かれる。ここは左の海豊川へ進んで行く。しばらくすると、水しぶきを上げて滝が左岸から流れ込んでいる。この滝は二段で80mはあり、水量もあって見ごたえのあ

る大きな滝だ。

この辺の獣道を歩いていると所々に熊の匂いが強烈に残っていて、いつもより多く笛を吹きながら進んで行った。この吐き気がするくらいの匂いは熊が縄張りを示すためのマーキングで、今回は近くにいない様だった。

最初の二段20mの滝は、右側の細かいホールドを登ると上部は滑床になっていてツルツル滑るので、落ちないように注意する。次の滝は、大きな釜を持った滝で簡単に巻いて行ける。ここを過ぎると小滝と滑滝が続き、歩いて気持ち良い沢になる。そして、二つの大きな滝が流れ落ちている600mの二俣に着く。

左側から流れている滑滝は、エスケープルートとして羅臼岳登山道のある屏風岩に抜けられる。今回は、正面の三段の滝を左岸の急なガレ場を登り、大きく高巻いて越えた。

この先もいくつか滝が現れるが、簡単に巻いて行ける。850mの二俣で左側の沢に入り、羅臼平を目指す。やがて水が涸れて急なルンゼの登りになると、岩壁に突き当たった。周りは岩に

囲まれていて簡単には進めないので右側の少しかぶり気味の岩を登り、さらにガレ場を登ってここを越えた。

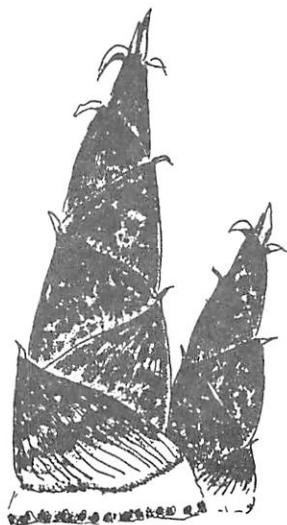
難所が終わると傾斜は緩くなり、草原の中を歩いて行く。ほんの少しだけ雪渓が遅くまで残っていた。最後にガレ場を過ぎると羅臼平に到着した。

羅臼岳は100名山なので登山客が多い。羅臼平では年配の早稲田大学探検部OBの人達と出会った。数十年前、知床半島を縦走した人達で、知床のエキスパートである。のんびり1時間ほど休憩してから出発する。

羅臼平からトラバースする登山道は歩く人が少なくハイマツに覆われているので、岩清水分岐まで登りかえす。分岐からは先は、雪渓が完全に無くなってガレ場になっていた。夕方暗くなる頃、羅臼キャンプ場に到着した。

9/21 : サシリイ川河口 (6:20) - 600m二俣 (9:30) - 850m二俣 (11:10) - 羅臼平 (13:00~14:00) - 羅臼キャンプ場 (17:30)

(笹平 記)



北海道

ヌビナイ川右股直登沢～ソエマツ岳

2003. 10. 4～10. 5

パーティー L 笹平 孝 (単独)

羅臼からクワウンナイ川へ向かった。旭岳ロープウェイに行くと、駐車場ではみぞれが降っていてTVモニタを見ると山の上は吹雪いている。今年のクワウンナイ川は諦めるしかない。次はヌビナイ川へ行こう。中札内からさらに南下し大樹町へ向かう。

夜の9時ごろヌビナイ川の林道に着いた。以前、営林署に問い合わせたら、この林道も大雨の影響で途中から通れなくなっているらしい。9月の下旬には復旧する予定と言っていたので、今は通れるだろう。

どんどん林道を進んで行くと、大雨の影響で枝沢の水が林道の上を流れている。段差が大きいからこの車じゃ無理だな。でもここに車を置くとしても、現在どの辺りまで来ているのかまったく検討もつかない。地形図を見ると、この先で林道が右岸と左岸に分かれる所があるので、なんとかしてそこまで行ってみよう。

ゆっくり進むと途中で動けなくなりそうなので、思い切って行くとフロント部分と車の底にガツンと衝撃があったが、なんとか通り抜けた。この先では砂利がえぐれ始め、縫うようにハンドルを切る。

このまま進むと戻れなくなりそうだととても不安だが、Uターンする場所が無いので強制的に進んで行く。すると少し広くなり林道が分かれている所に着いた。ここに立て看板があり、この先はまだ完全に復旧していない事が分かった。これで現在地が

はっきりしたが、まだ先に進めそうだ。少し行った所で泥道に変わったので諦める。車は安全な場所に置きたいので、道のしっかりした所まで戻った。

10/4 結局、林道が分かれる所から1km戻った所に車を止めたので、林道終点まで6kmも歩かなければならない。

今年の日高周辺はこんな状況がほとんどだ。本来なら車で行ける所を歩かされるのは疲れるが、仕方がないので歩く。途中には林道が跡形もなく流されていた所もある。林道終点からは支流の沢を横断し、ヌビナイ川左岸にある古い林道を歩く。30分も行くと林道が切れて無くなったが、林道はこの先も続いているようだ。ヌビナイ川の中州にはテープが下がっていたので、ここから沢に入った。

獣道はあまりないので、河原を歩いて行く。ここの河原の岩は不思議とまぶしいくらい白く反射している。507mの二俣から先はゴルジュ帯に変わり、すぐ先では左岸から右岸に渡渉する難所がある。ここは川幅が狭くて流れが速く、30センチも増水すれば渡れなくなる所だ。この先はゴルジュの一段上がった緩斜面に踏み跡が続いているので、滝や釜はすべて巻いて行ける。途中には、泥や砂利で滑りやすい急なスラブのトラバースがあり緊張させられる場所がある。

655mの滝では、右岸から流れ落ちる滑滝に向かって高巻いて行く。高巻

いた所からは、滑滝とエメラルドグリーン
の釜が連続して続いている七つ釜が目の前に広がり、思わず声を上げてしまう。さすが日高で一番美しい沢だけあるなあ。

ここから沢に降り、何ヶ所か小さく巻きながら滑を歩く。やがて河原に変わり790mの広い二俣に到着する。右岸には良いテン場があり、ここにツェルトを張った。この後、ヌビナイ川右股沢からソエマツ岳に上る二俣を確認するために偵察に出掛けた。テン場に戻り、焚き火とビールで贅沢に日高の沢を満喫する。

10/5 余計な荷物は置いて出発。ヌビナイ川右股沢を登り、950mの二俣でソエマツ岳に上る左側の沢に入る。

大きな滑滝が二段続き、小枝を掴んで越えると傾斜が緩くなりほっとする。しばらく進むと、沢は1250mから急なチムニー状の滝に変わり難くなる。1300mの二俣で右側から流れ落ちている滑滝に行く。ここが今回の核心で、急な滝の岩場が50mほど続いている。

やがて水も無くなり沢床は藪の中を一直線に上へと向かっているのが楽に登れる。上部では草原に変わり、周りは熊の掘り返しで階段状になっていて登りやすい。最後は3mくらいのハイマツ漕ぎをすると頂上直下の稜線に抜けられた。稜線上の踏み跡を辿るとソエマツ岳頂上はすぐだ。

頂上からは遠くの海まで見渡せ、カムエク周辺はすでに雪で白くなっていた。帰りは来た道を戻り、核心の1300m上部の急な滝でロープを出すのがめんどうなので、途中からヤブ漕ぎをして隣の沢筋を降り1300mの二俣から少し下がった所に出た。この後、急なチムニー状の滝や大きな二段の滑滝を慎

重にクライムダウンで降りる。テン場へ戻るとツェルトをたたみ、すぐに下山開始。

今日の午後から天気が悪くなるという天気予報は当たったようだ。七つ釜を過ぎた所で急にヒョウがパラパラ降りだし、激しい雷雨になった。マジかよ、増水する前にこの先の難所である渡渉をしないと、ゴルジュ帯でもう一泊になってしまう。

雨は小降りになったが、また激しくなるかもしれないので急いで下る。ただでさえ滑りやすいトラバースなのに、この雨で濡れてさらに難しくなった。急いでもまったくスピードは上がらない。そして、増水する前に難所をなんとかクリアできたので良かった。

507mの二俣までくれば、多少増水しても帰れるので安心できる。この先、長い河原歩きが続いて林道終点に着くと、さらに長い林道歩きが待っている。車を駐車した近くまで来ると雨が激しく降りだし、全身びしょ濡れで車に乗り込んだ。

10/4 車 (7:30) -林道終点 (8:30) -507m二俣 (10:50) -七つ釜 (12:00) -790mテン場 (13:10)

10/5 テン場 (5:40) -950m二俣 (6:00) -1300m二俣 (7:00) -ソエマツ岳頂上 (8:10) -テン場 (10:40) -507m二俣 (13:00) -林道終点 (14:40)

(笹平 記)



ヌビナイ川右俣の源頭部にて 笹平



サシルイ沢二俣付近にて 笹平

北海道

モセカルベツ川

2003. 10. 12

パーティー L 笹平 孝、他1名

10月に入ると標高の高い日高や大雪山周辺の山は、真白く雪が積もり冬山になっていた。

東大雪にあるニペソツ山に登った後、再び羅臼に戻った。今回、一緒に行く羅臼の人と酒を飲みながらモセカルベツ川の計画を練る。

沢を詰めた後、稜線から縦走して羅臼岳経由で下山する計画だったが、最終的には硫黄山経由でオホーツク海側に抜ける魅力的な知床半島横断コースに決定した。

出発前日の夜、車2台でウトロ側にあるカムイワッカへ向かい、駐車場に車を1台置きに行った。帰り道で、2頭の熊が道路の真ん中で立ってじゃれ合っていた。はじめは人かと思ったが、全身黒いのですぐに熊だと分かった。意外とヒグマは背が高い。立つと人間よりも大きくて迫力がある。5メートル位まで近づいたら、やっとこちらに気づき山の中へ逃げていった。

モセカルベツ川に架かる橋の所から、沢沿いに林道が延びている。林道を少し入った所に車を置いた。林道はすぐに無くなり沢の中をジャバジャバ歩く。鹿が歩いた獣道がしっかりとあるので、どんどん利用して行く。

近くの木からバサッバサッとシマフクロウが飛んでいった。実際に見ると、思っていた以上に大きい。突然前方からバキバキと音がした。何か黒い物体が逃げて行く。今度は何だ、熊だべア。

熊が人間に気づき、沢から急斜面を登って逃げていった。本州にいるツキ

ノワグマの倍くらいある大きさだったので、まだ若い熊だ。知床のどの沢にも熊が付けたマーキングの匂いがプンプンしているが、沢の中で熊と出会った事は今まで無かった。熊に対して常に鈴や笛で対応していても沢は、水の音がうるさかったり蛇行していたりで、熊が人間に気づいた時には距離が近くなるので十分注意したい。

標高480mで現れる15mの滝では、左側を直登して行く。ホールドがたくさんあるので意外と簡単に登れる。この先大きな滝は無く、小滝やナメが続き非常に美しい。

今回は、紅葉の時期に来て正解だった。標高700mの二俣は、すり鉢状の大スラブになっていて、水流がほとんど無くなっている。左方向にスラブを登って行くと、抜け口の所が4mほど急な岩場になっている。中間にはハーケンが2ヶ所打ってあったが、ロープは出さないで行く。

ここからモセミネ川に変わり、水が涸れた沢になった。上の方でバキバキ枝を折りながら何かが逃げて行く。コケモモを食べた熊のフンがあったので、稜線に出ても気が抜けそうにない。しかし、この沢は熊の密度が高いなあ。

標高1050mの二俣を右に進む。3週間前には羅臼岳近くの雪渓が無くなっていたのに、ここにはまだ少し雪渓が残っている。驚いた事に、時期外れのツガザクラが一面に咲いていた。雪渓とガレ場登りがしばらく続くと、のっぺりとした稜線が見えてくる。沢は知

円別岳と東岳のコルへ向かっている。そして、稜線直下にあるグラウンドに出た。ここはハイマツの中に野球が出来るくらい広く平らな砂地がある所で、何とも不思議な場所だ。

稜線からは登山道になり、知円別岳分岐から硫黄山の方へ向かう。疲れていたの、硫黄山はやめておく。硫黄山分岐からの下りは、ガレ場で登山道が無くなっている所もあり歩き難い。

途中の硫黄採掘跡からカムイワッカ川へ向かって沢筋を降りて行く。沢筋は滝になってしまったので、急な崖を木を頼りにクライムダウンしてカムイワッカ川降りる。少し下った所で見覚えのあるカムイワッカの湯に着いた。

さっそく温泉の滝つぼに入り汗を流す。ここは一般の人がほとんど来ない（来れない）一つ上の滝つぼなので今回も貸切だ。のんびり30分くらい入ってから車がある駐車場へ降りた。

10/12 モセカルベツ川河口（6：15）-700m大スラブ二俣（9：20）-稜線（12：40）-硫黄山分岐（13：50）-カムイワッカの湯（16：10）-駐車場（17：00）

（笹平 記）



ニペソツ山頂上にて 笹平

二口山塊名取川 大行沢～カケス沢

2003. 9. 30～10. 1

パーティー L坂田英希（単独）

二口山塊、名取川・大行沢はいき
なりのナメで始まる。

言葉を失う自然の造形は人々の右脳
を刺激する。

芸術にも似たその奥のゴルジュは
優しげな流線形を型造るがなかなか
どうして微妙なバランスが必要。

「流線形のプロムナード」

そんなフレーズがとてもよく似合う

ゴルジュが終わると一転穏やかな
流れとなる。

木漏れ日の中、ブナの森に囲まれ
て瑞々しい沢歩きはココロも弾む
沢はやがて滝にへと突き当たる。
コケのついた足元は決してよくはな
い。

巨石帯から岩魚が走りはじめ、た
まらず竿を出す。

ここでの釣果が今宵の食卓を彩るの
だから気合も入る。

せめて一匹あがれば今夜のディナー
は仕上がる準備

祈るようになれない手つきで竿を振
れば慣れないサカナがかかってくれ
るものらしい。

このオモシロさ、このゼイタクさ
山には楽しさがイッパイ詰まってい
る。

まるで子供のような無邪気さで、大
人のようにそんなことを想うのでし
た。

巨石帯、ゴーロと溪相は移り変わ
り、そしてついにあわられるのが大
ナメ。

大ナメ沢って言うくらいなもの、
それなくしてはどうにもならんって
ことなのですよ。

広くてとめどなく続くが如きこの天
国的ナメは、もはやため息すら出て
こない。

トートツな感激に独りたたずみ、
さわさわという沢の音に耳を澄まし
て、足元の流れにただ見惚れるほか
はなかった。

さあ、お楽しみの時間がやってま
いりました。

ゆっくり時間をかけて楽しみながら
だからこそ味わいも深い。

焚き火をはじめたら炊事の準備に
取り掛かる。

持参の食材に加え十分な岩魚も確保
できたので燻焼きにしてお土産に。
岩魚鍋、岩魚焼飯、岩魚燻焼、岩魚
の刺身・・・。

硫黄沢で笹平さんに教えていただ
いたテクニックでもって何とか膳を
盛るコトができました。

独りニヤつきながらの豪華な夕食。
おいしいものはおいしいのです。

明けて本日も山日和
一夜を明かした場所からは大行沢の
支流カケス沢へと踏み込む。

ほとんどの荷物はここにデポして行
くことができます。

ナメで始まるカケス沢もやがて小
滝が顔を出し、連瀑帯へとその姿を
変える。

流れに磨かれた滑らかなスラブは
美しくもあり陰しくもあり。

ときに高巻き、よくない草付をトラ
バースし懸垂で沢床に戻る。

艶やかなる流れは已をくねらせる
ようにして釜から釜へと落ちてい
く。

思わずドキッとしてしまったりして。
そしてまあい釜は芳醇な水をたたえるのです。

連瀑を過ぎると途端に流れは平凡となるが最後のお楽しみが待っているはず。

眼前にあわられるのは北石橋。

思わず声が上がりそして唸る。

君に出逢えてよかった。

そう思うのが精一杯。

もはや観念するほかなかった。

それほどに、言葉にならない偶然がそこにある。

北石橋からはよく踏まれた径をさくさく歩く。

幕場に帰り着いたら一服。

ホントはもっと遊んでいたいのです。
しかしそういうわけにも参りません。

下山後の温泉を餌にどうにか社会復帰への一步を踏み出すのです。

あとは複雑な思いを胸に登山道を胡桃の実を拾いながらゆっくりとゆっくりと下りました。

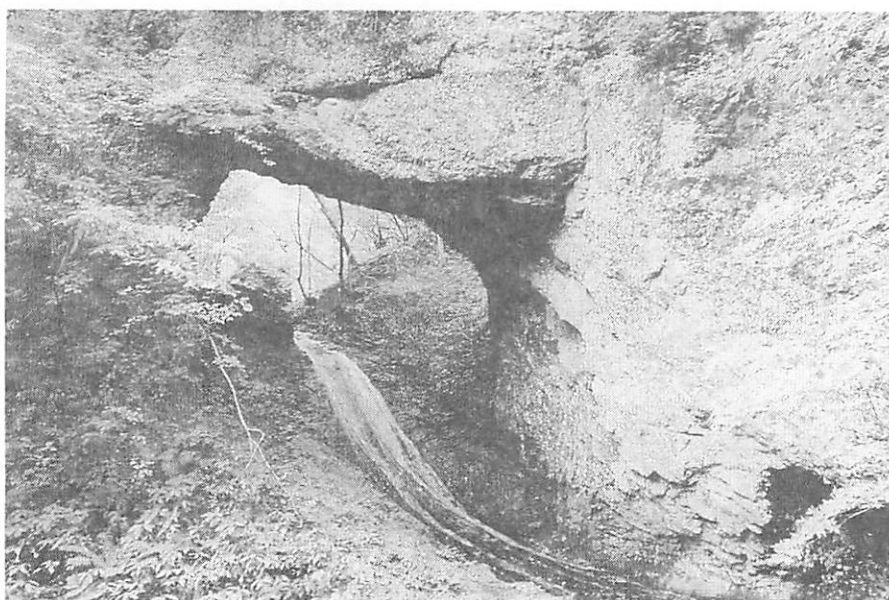
第1日 二口キャンプ場(8:00)ーゴルジュ出口(8:40)ーカケス沢出合(14:15/14:45)ー

遡上ー下降ーカケス沢出合(16:15)

第2日 カケス沢出合(8:20)ー連瀑帯(8:45~9:45)ー北石橋(10:05/10:25)

ーカケス沢出合(10:45/11:15)ー雨滝(12:05)ー二口キャンプ場(12:45)

(坂田 記)



カケス沢 北石橋

日本山岳耐久レース（長谷川カップ）

2003. 10. 25～10. 26

完走者 渡辺 聡子

長谷恒カップは参加してみたいと思い続けていたイベントである。

毎年体育の日の連休に開催されるので、『せっかくの連休山にいかなくちゃ』と参加できずにいた。だが今年は選挙の関係だとかで連休をはずして普通の土日に開催されるとの話を聞きつけ、出るなら今年だわ！！と意気揚々と申し込みをし、参加費を払い込んだのだった。

その後怪我をしたりアクシデントがあったりとろくにトレーニングもできないまま当日をむかえてしまい非常に不安だったけれど、とりあえず目標を完歩において各ポイントに制限時間を設定しメモを片手の出発となった。

参加している人々は山歩き屋というよりはランナーが多いようで、ランニングにタイツという格好をしている人がやたらと目についた。

出発と同時にみんな走る走る。小走りでどんどん先へ進むので、始め歩いていた人達もつられて走っていったがわたしは走ると後できつくなると言い聞かせ歩きを通した。

コースはすぐに山に入り狭い道となったので予想通りつかえてなかなか進まない。登りはつかえるくせに下りは我先にと走って降りていく。一番疲れる歩き方だよなあと思いつつ、登りも下りもできるだけ同じペースで進むように心がける。登りはわきの方から抜かせてもらい下りは抜かされるというのがしばらく続いた。1時間もたつと人もかなりばらけて歩きやすくなり、くどいようだがペースを一定に保つことだけを考えながら歩いていた。

やがて日もおちてヘッドランプの明かりを頼りに歩くことになる。コース上所々に道標となる赤いランプがあるのだが、真っ暗な中を歩いているとほんとにコースを外れていないのかどうか不安になってくるもので他の参加者のヘッドランプがみえるとほっとしたことが何度かあったが道路の脇に転がって寝てる人にぎょっとしたり、突然暗闇の中から人が現れて驚いたりなかなか楽しい真夜中の山歩きだった。

大休憩はとらない、寝ない、ペースは一定にというのが功を奏したようで、自分で設定した時間よりもかなり早く歩くことができ、最後の登りを登り切って後は下るだけというところまで来たのがうっすらと空が明るくなりかけてきたころであった。

これは完歩どころか20時間をきってゴールできるかもしれない！！と思い始めた矢先、突然膝に激痛が走り思うように歩けなくなってしまった。残すは下りだけというところまできて、よりによって下ると痛むという最悪の状況になってしまった。本来ならばここでペースアップをして時間を稼ぐはずなのだが、ゆっくりしか歩けない自分が非常にもどかしく、どんどん抜かれていくのにもとても悔しい思いをした。リタイアだけはするまいとだましだましあるいて何とかゴール、時間はとても公表できないお粗末なタイムになってしまった。ま、当初の目標は完歩だったのだからまあよしとするしかないのだが・・・。

数ヶ月たった今でも膝は未だによくならず山に行くのにサポーターとス

トックのお世話にならざるを得なくなりました。あ〜あ。こんな目にあいながら完歩したのにスタッフの人に渡された完歩賞のTシャツはあたしにゃサイズが小さいのー。

あれってユニセックスじゃないのよね。これ読んだ都岳連の人、あたしに合うサイズのTシャツちょうだい。

(渡辺 記)



剣岳ハッ峰六峰Aフェース登攀後の
松原、名雪、金沢



両神金山沢を遡行する木南、吉田

清ちゃんとの最後の山行（奥秩父・二子山西岳中央稜）

2003. 11. 2

パーティー

L 本図一統、小林美穂（会員外）

ACC-J東京隊 名雪博二、松原丈夫、金沢 清

「こんど中央稜に案内するよ」と、小林さんと約束してから、まる2年は過ぎただろうか。その後、日程が合わなかったり、私がケガをしてしまったりと延びのびになってしまっていた。喉につかえものをしていようが気が気でなかったが、やっと約束を果たすときがきた。当日は、別パーティで東京のメンバーも参加することになった。小林さんは、登攀も楽しみだが、東京の連中との前夜祭（宴会）がそれ以上の楽しみだと言っておられた。

ここで小林さんのことを少し紹介しておく。小林さんは、渡辺さんと同じ職場の方で、私とはスポーレクライミングジムでの知り合いである。フリークライミング志向で、11c オンサイト、12a レットポイントといったところ。以前ジムで体脂肪率を測ったとき、私が16%に対し彼女は14%だったという、体格もフリー仕様の、正に常連のミススポーレである。実家は長野県の池の平でペンションを経営しており、そこの一人娘で、スキーも指導員の資格を持っている。宴会大好き人間で、彼女に関するエピソードはたくさんあるらしい。どこに出しても自慢のできる容姿端麗な酒豪娘である。

前夜、登山口の駐車スペースで東京の名雪、松原、金沢と落ち合い、早速宴会が始まる。いつものように、宴会は盛大に楽しい夜が更けていった【今でも現実のこととは思えないのだが、12月10日、松原は仕事で

転落し、脳挫傷のため現在意識不明の重体（以前に記述済み）であり、金沢は、12月31日、明神から徳本峠に向かう途中、急性心不全で帰らぬ人となってしまった。人の運命って……。

さて翌日は風もなく雲ひとつないドピーカン。トップで登るため取付に急ぐ。一人娘の小林さんを、もしラクなんかでケガでもさせてしまったら切腹しても許してもらえないだろうから。取付に着くと誰もいなかった。一安心。小林さんは次回にでも登るつもりなのか、すぐにローソク岩を偵察にいった。東岳の方には何回も来ているが、西岳は初めてとのことだった。

我々が先行し東京パーティは後に続く。1ピッチ目、簡単なフェース。2ピッチ目、どこを登ろうかちょっと迷うが、前登ったクラックには行かずIV+のフェースを行く。核心の3ピッチ目、凹角を素直に1ポイントだけボルトに足を乗せ登る。マルチピッチはあまり経験がないという小林さんであるが、そこはそれフリークライマーの実力を発揮、楽勝だという表情で登ってきた。でも「サトちゃんの話していたボルトってあれなのね、私も使っちゃったわ」と言っていた。大テラスで後続の東京パーティを30分ほど待つ。お天気最高で暖かく、日向ぼっこはとても気持ちがいい。

マルチピッチだと、経験の少ない人は緊張するものだが、小林さんは余裕があってとても落ち着いてい

る。これは、とりもなおさずフリークライミングの実力からきているのである。「リードしてみるかい?」と言ったら「登るのは難しいと感じないけど、どこを登ったらよいかわからない」という返事だった。納得できる回答である。私はアルパインクライミングをやる奴は、フリークライミングもやらなければダメだと断言する。確かにフリーだけでは、ルートファインディングなど不十分な面はあるが、岩登り技術は間違いなく身につく。それが身の安全に繋がることは確実だ。会員諸君も、山に行かないときはフリークライミングに力を入れて訓練してもらいたいものである。

4ピッチ目、脆いフェース。5ピッチ目は2ピッチ分を一気に登ってしまう。50mロープでは足らず、小林さんに少し登ってもらってビレー点(終了点)に着いた。やがて彼女が登ってきたので「おわりだよー」と言ったら「はい」と素敵な笑顔をした。完登の握手をしながら下を見ると、後続はまだ大テラスにいるではないか。装備を整理してから、小林さんがまだ踏んだことないという頂上に行く。近くにいたハイカーにツーショットの記念撮影をお願いする。頂上から見える中央稜はとても格好良く、人気ルートだけあって、たくさんのパーティが行列で登っている。ときどき「ラク」という声も聞こえてくる。やっぱり早く取り付いて良かった。

終了点に戻り、しばらくすると、ガイド(N氏)と、そのお客さんが登ってきた。東京パーティは先を譲ったようだった。ガイドとお客さんの会話を聞いていると、お客さんは非常に満足したようで、これだけ客に喜んでもらえるとガイド冥利につきるだろうなと感じた。このルートでガイド料はいく

らなのだろうか、つまらないことを考えながら待つこと1時間以上で、やっと東京3人組に登り着いた。

彼らが来ると急に騒々しくなる。「天皇陛下万歳」といつも叫ぶが、今日は言わなかったN、「・・・友の会」のメンバー、当会の3馬鹿トリオの一人と言われたK、「ガントウ期に滝沢リッジのミットンで、イグルーはめてゴーグル作った」など、何とか語録で有名なM。みんな独身の頃からの付き合いだが、性格は若い頃とちっとも変わっていない楽しい連中だ。

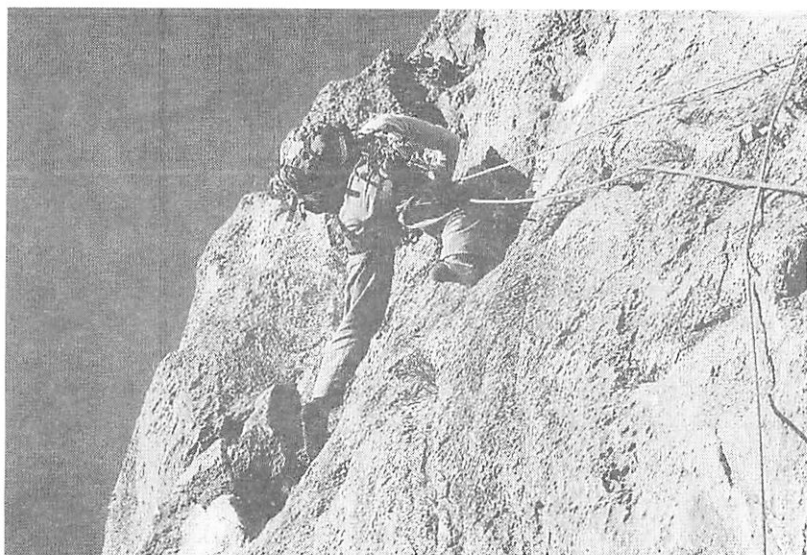
下降は、私と小林さん(履物がズックなので)は一般ルートを、他の3人はちょっと難しい岩場ルートから下りる。股峠で合流したとき、金沢氏は「あ〜胸が苦しい、死にそうだ」などと訴えていた。いつもの冗談半分と考えていたが、今思えば12月31日の前兆ではなかったかという気がする。

東京パーティは、これから小川山麓で大宴会をして明日帰るとのこと。駐車スペースで彼らと別れ茨城に向かう。金沢氏の元気な姿を見たのはこれが最後になってしまった。

小林さんは、天気にも恵まれ、快適な登攀ができてたいへん満足だったと喜んでくれた。今度は渡辺さんと北岳バットレスに行きたいと夢を膨らませているようだった。彼女は話も豊富で面白く、退屈することなく、道路も空いていたのであつというまに茨城に着いた。話に出た「黒糖水羊羹」はぜひ食してみたいものである。

下妻に着いたのは四時頃だったが、翌日も休みである私は、友人と下館で五時に待ち合わせ、家に帰ることなく、痛い足を引きずりながら、そのまま次の目的地奥只見に向かった。

(本図 記)



二子山中央稜をリードする木南

日光白根山

2003. 11. 22

パーティー L 鈴木 拓 (単独)、楠克之 (会員外)

つくばから比較的近く、雪と風がありそうな日光白根山に行くことにした。白根山は、一般道としては湯元からのコースと菅沼からのコースとがあるが、湯元からのコースは何回か登ったことがあったので、今回は菅沼から登ることにした。

つくばを当日の朝2時に出発し、菅沼登山口に5時半頃ついた。行く途中で、中禅寺湖の近くに赤信号が点滅している交差点があった。左折するために少しスピードを落としてその交差点を通り過ぎたら、しばらくしてパトカーが背後にやってきて止められた。赤信号の点滅は一時停止であり、そこを一時停止せずに通り過ぎると信号無視だということで、2点と7000円取られた。

登山口では既に雪が降っていた。6時半に出発し、雪がうっすらかぶる登山道をひたすら登り、阿弥が池に8時につい

た。ここら辺までくると、風がかなり強くなっていた。さらに登って、白根山山頂には9時15分についた。山頂付近では風雪が激しく、目だし帽をかぶった。

山頂を後にして、避難小屋に10時、前白根山山頂に11時20分についた。前白根山から五色山の間は風がかなり強く、歩くことがしばしば困難であった。この強風のせいで体感気温がかなり低く感じられた。日光白根山でゴーグルを使う羽目になるとは思わなかったが、一応と言うことで持参して正解であった。

阿弥が池を経由し駐車場に戻ったのは14時であった。帰りは相変わらずの渋滞で、つくばには19時半についた。適度な風雪があり、結構充実した山行を楽しめた。

(鈴木 記)

筑波山登山マラソン

2003. 12. 7

鈴木 拓

コースは筑波山神社からつつじヶ丘、女体山、御幸ヶ原、男体山山頂駅付近までの4.3kmである。トレーニングとコースの確認の意味で、前の週の日曜日に下見に行った際には、70分かかった。インターネットで調べたら、ある年の記録で、48分位のタイムで10人中6-7番目ということだった。本番ではダントツのビリになるのではないかと思われた。

当日は10時に筑波山神社に集合し、10時半にスタートである。参加者は成年男子、成年女子、少年男子、少年女子の4部門に分かれ参加することになる。

参加人数であるが、成年男子の部はなんと4人しかいなかった。上位4番までは入賞者として、賞状と賞品をもらえることになっていた。この時点で入賞はほぼ約束された。ただ、参加者の顔ぶれを見るとやはりそれなりにトレーニングを積んできたような人たちだった。

スタート。後はひたすら登るのみ。つ

つつじヶ丘付近の急な登りが苦しかった記憶がかすかにある。もう勘弁してくれよ、というところでやっとゴール。

タイムは49分15秒。山頂駅近くの展望台レストランでサービスのお汁粉を食べた後、表彰式。賞状と賞品（バンダナ）をいただいた。

筑波山は茨城県で一番有名な山なのに、どうして筑波山登山マラソンはこんなにマイナーなのか。成年男子の部の参加者は4人しか居らず、成年女子の部に至っては0人であった。思うに、これはひとえにPR不足によるところが大きいと思う。

インターネットで調べようと思っても情報が得られないし、関係者が見そうな雑誌や、常陽リビングなどの情報誌にもアナウンスはなさそうである。県岳連の方はもう少し、筑波山登山マラソンのPRについて考えた方がよいと思う。

(鈴木 記)



谷川岳雪上訓練

2003. 12. 14

パーティー 木村 一、笹平 孝、吉田、仁、坂田英希、鈴木 拓
木南真紀子、須賀泰司、

私が新人の頃は雪上訓練は11月の末に富士山で実施するのが恒例になっていました。

しかし、ここ数年は暖冬の影響なのか、11月末の富士山は雪が少なく雪上訓練が出来ない状況です。今年も非常に雪が少ない中、谷川岳で雪上訓練を実施する事にしました。

事前の調査では雪が少なく、滑落停止訓練及びビーコン搜索訓練等は出来ないのではないか？との不安もあり、雪上訓練が出来ない場合にはスキー&スノボの練習をしようと考えて、それぞれがスキー、スノボをもって谷川岳に向かいました。

ロープウエーで天神平に上がると、何とか雪上訓練が出来そうなので適当な斜面を見つけて訓練開始。しかし、如何せん雪が少ない。滑落停止訓練は出来そうにない状況だ。

笹平指導員の指導のもとに、ワカンでの歩行訓練、アイゼンを履いての歩行訓練、滑落停止の真似事、スタンディングアックスビレーの真似事等を実施し、その後ビーコンを使用した搜索の訓練を実施したが、雪が少ないので隠

したビーコンは直ぐに見つけられてしまう状況でした。

ゾンデ棒を使用した搜索訓練、雪の弱層テスト、雪崩の埋没体験、遭難者のシート搬送訓練等は出来なかったので、春先に再度訓練を行う予定で今回の雪上訓練を終了しました。

遅い昼食後、半年振りの雪の感触がワクワクする初滑り体験。

滑る時間も少ないのでリフト券は数人が共同で回数券を購入してリフトに乗っていたが、数回リフトに乗っていると、リフト乗場にいたおっちゃんが『回数券をよこせ』と言うので『あと数回乗れるよ』と不満そうにいうと『あとはここを通過する時に手を上げて合図すればいいよ』と言うではないか。

内心『いやー話の分るおっちゃんやなー』と思い、その好意に甘んじる事にしました。

その後は何回リフトに乗ったかは忘れましたが、1日券を購入したのと同じような待遇です。すっかり天神平スキー場が好きになりました。

(木村 記)



谷川岳での雪上訓練

《寄稿》

女性パワーをいただきたい！

本図一統

（「ひとりを生きる」著者 一ノ瀬綾）という本が手元にある。2月初め、風濤社という出版社から郵便物が送られてきた。心当たりのない荷物を開けてみると、この本が入っていた。

どんな商売でも、常連さんとか、お得意さんとかいう人がいると思う。わたしのような職業でも、お得意さんとはいわないけど、顔なじみの方は結構いるものである。

5～6年前だったろうか、駅の階段で転んで足首を捻ったという女性がきた。保険証の住所をみると八郷町とある。昭和7年生まれ、名前は「K川Tつよ」といい、その保険証は日本文芸美術協会のものであった。都会人を想わせる品のよさや、言葉遣いから、この方は芸術関係の仕事をしている人で、多分一人暮らしをしているのではないか。さらに、田舎では苗字を聞くだけで、どこの集落に住んでおられる人か、おおよそわかるものであり、K川という聞きなれない苗字から、どこからか引っ越してこられた方だな、ということが想像できた。

仕事がら、他人のプライバシーに触れなければならないこともあるが、もちろん仕事上必要と思われること意外、あれこれと質問するようなことはない。古い保険証は、家族構成や続柄等、こちらが知らなくてもいいようなことまで記載してあったが、現在のそれは、プライバシーが守られるよう配慮されている。

その後、腰や手首をケガして何回も通っているうち、K川さんは長野県生

まれの小説家で、ずっと独身で通されてきたことなどを話されたことがあった。あるとき「最近上梓しました。よかったら読んで下さい」といって、サイン本を下さった。それは（「家族のゆくえ」著者 一ノ瀬綾）というタイトルの本で、このとき初めてK川さんのペンネームと、彼女は農民文学の作家であり、日本農業新聞に連載をもっていたことがわかった。69年、「春の終わり」で第12回農民文学賞受賞。76年、「黄の花」で第16回田村俊子賞受賞。その他多くの作品があることも知った。

「家族のゆくえ」では、農村の生活、嫁姑問題、農業後継者問題、バブル時の土地高騰、家庭崩壊、都会に出た子供たちの苦しい生活などが如実に書かれていた。

一昨年、K川さんの近所の方から、彼女が長野県に転居されたことを聞き驚いた。その後、本人から急に佐久に引っ越した旨のはがきが届き、元気でいらっしゃることがわかり安心した。

さて、冒頭の「ひとりを生きる」を拝読させていただくと、この本は彼女の自伝ともいえるエッセイ集で、これまで新聞や雑誌、同人誌に書いてきたものをまとめたものである。

恋愛をするなんて考えられなかった時代の田舎で、周りの反対を押し切って育んだ農業青年との熱烈な恋が、青年の裏切りによって破綻した。28歳のとき農家である実家を家出同然で飛び出し、デパートの派遣店員をやりながら全国を回った。なぜこれ

まで独身で通されてきたか。どうしてこんな田舎の八郷町に転居し、そしてなぜまた佐久に引っ越したか。などなど彼女のいままでの生き様が赤裸々に書かれていた。

特に印象深かった一文がある。

「故郷の訛り忘れし春なれば ^{なま}ふるき痛手も押して流さん」

K川さんが初めて詠んだ歌だそう
で、九州を一人旅したとき、それまでどうしても許せなかった裏切り彼に、大型絵葉書にこの歌だけを書いて送ったという。さすが文学者は私みたいな凡人とは書くことが違うと感服した。

「男なんてアテにならないわよ、最後は裏切りやがって」

以前、K川さんが私にちょこっと漏らした言葉である。今になってそれは、この彼のことを言ったのだとわかった。

現在、結婚しない（したくない）女性が増えているという。男社会では、それは女性に経済力がついたからだ
と、簡単に片付けようとする輩が多いが、それだけでないのではなかろうか。煩わしい儀父母や小姑との付き合いや、世話のかかる亭主や子供の面倒をみて一生をおくるより、仕事や趣味に生きがいを見出した女性が多くなったのだと思う。「ひとりを生きる」を読んで、女性が一人で生き抜くのも悪くないな、と思うようになった。K川さんは、今の女性の考え方を40年以上も前に持っていたのである。

こう書いても、本の内容がわからないみなさんには、なんのことかわからないと思う。すでに3分の2を生きてしまった私にも、これからの人生を過ごしていく上で、良き勉強になった。R&Vは山岳会の会報であるから、本

の内容を詳しく書くことは控えるが、みなさんにも時間があつたら、ぜひ読んでもらいたい一冊だと感じた。

登山界も、女性の進出、活躍がめざましい。他会の会報を読んでも、女性が海外の山にどんどん挑戦している。それはヒマラヤ、ヨーロッパ、ヨセミテとジャンルに関係なしである。男女登山人口の割合から見ると、海外登山を目指す人は、女性の方が男性より高確率ではなかろうか。山で会う中高年登山者を見ても、女性のほうが男性より明らかに元気ではつらつしている。当会においても今年、2名の女性（当会に女性は現在2名しかいない）がヨーロッパアルプスに行くという。ぜひ目的を達成してもらいたいものだ。

K川さんの住む佐久というと、山への行き帰りによく通るところである。今度時間があるときにでも寄り道して、彼女の「元気のおすそ分け」でもしていただき、私も足が治ったら、お誘いをくれる友人たちと海外遠征！と、するか。

（本図 記）

《 友 好 山 岳 団 体 の 月 報 、 会 報 、 そ の 他 》

ありがとうございました

—— 月 報 ——

- ◎ Rohman NO. 220 2003. 10 B5 32P 浦和浪漫山岳会
奥秩父・滝川本流ピストン、毛猛・黒又第2ダム～檜沢本流～七右衛門沢～檜岳～西尾根、黒又左岸・唐松山羽根川唐松沢、川内・一ノ俣沢～早出川下降～ドウガン沢～ウズノ沢～室谷、広倉沢左俣一の俣越～今早出川～広倉沢左俣～大滝手前左岸尾根～五陰谷岳～夕沢
Cルンゼ左岸尾根～悪岩沢～今出、奥秩父・笛吹川西沢ヌク沢～破風山～ナメラ沢、足尾・坪川・小田倉沢ほか
- ◎ Rohman NO. 221 2003. 11 B5 30P 浦和浪漫山岳会
那須・大佐尾川西俣～大佐尾川への林道～大佐尾川二俣、上越・仙ノ倉岳～シッケイ沢左俣～イイ沢、下田・光来出川、秋田・森吉ニロ川赤水沢左俣～様の沢右俣、秋の集中・奥利根赤倉岳・4パーティにて集中を果たす、ほか
- ◎ Rohman NO. 222 2003. 12 B5 20P 浦和浪漫山岳会
安達太良山、奥秩父・入川矢竹沢ほか
- ◎ わらじ NO. 572 2003. 11 B5 12P わらじの仲間
川内・中杉川、谷川・西黒沢ザンゲ沢ほか
- ◎ わらじ NO. 573 2003. 12 B5 10P わらじの仲間
会務報告ほか
- ◎ さわぐるみ NO. 14 2003. 11 B5 28P グループ沢胡桃
二口。大行沢～カケス沢右俣、栗駒・産女川、焼石・夏油川枯松沢～胆沢川尿前沢～夏油川本流、胆沢川小岩沢～南本内川、焼石・尿前川本沢ほか
- ◎ さわぐるみ NO. 15 2003. 12 B5 24P グループ沢胡桃
谷川・大源太川シンゴヤ川～ヒロスボ沢、上州武尊山・川場谷、飯豊・弥平四郎～三国岳～飯豊山、妙義・裏谷急沢、奥多摩・峰谷川坊主谷坊主小屋沢、奥秩父・ヌク沢左俣左沢ほか
- ◎ Next! NO. 93 2003. 9 B5 16P 山岳溪流釣り集団むげん
大井川、黒部・赤木沢、川内・谷沢川ほか
- ◎ Next! NO. 94 2003. 10 B5 16P 山岳溪流釣り集団むげん
川内・室谷川、越後・登川・米子沢ほか
- ◎ Next! NO. 95 2003. 11 B5 8P 山岳溪流釣り集団むげん
丹沢・水無川源次郎沢ほか
- ◎ Next! NO. 96 2003. 12 B5 12P 山岳溪流釣り集団むげん
プライベートウォール製作ほか
- ◎ とまのかぜ NO. 131 2003. 10 B5 32P 童人トマの風
下田・大谷川鎌倉沢、奥秩父・豆焼沢、入川真ノ沢～東沢釜ノ沢、谷川・桧又谷ススケ沢、荒沢、足拍子川フトゴキ沢、足拍子川本谷、北沢本谷、赤谷川笹穴沢、赤谷川本谷、鷹ノ巣C沢、上州武尊・塗川荒砥沢、栗駒・迫川相ノ沢、巻機・南ノ入沢右俣、佐渡・石花川イラツボ沢、奥秩父・中津川信濃沢ほか
- ◎ とまのかぜ NO. 132 2003. 11 B5 60P 童人トマの風
神室・大横川右俣、根ノ先沢本流、左俣左沢、西の又沢スガサイ沢、釜の沢、赤岩沢、奥利根・奈良沢川上トトンボ沢～ブサの裏沢、越後・姥沢川南ノ入り沢左俣、割引沢ヌクビ沢三嵩沢、平ヶ岳・恋ノ岐沢、南八甲田・浅瀬石川・滝の股沢～田堰沢、上信越・四万川～白砂川～日向見川、釜川右俣、谷川・湯檜曾川・湯ノ沢、越後・水無川真沢、南会津・布沢川大滝沢、北海道・エサオマントツタベツ川、コイボクシュメナンシュンベツ川、

ボンショカンベツ川、暑寒別岳沢巡り、南ア・尾白川本流～黄蓮谷右俣、会越・中津川手沢ほか

◎とまのかぜ NO.133 2003.12 B5 26P 童人トマの風

頸城・駒ヶ岳～鋸岳、越後・ジロト沢左股～大兜山、両神山・金山沢～石船沢～藤十郎沢～槍ヶ岳沢、谷川・茂倉岳～武能岳～蓬峠、アメリカ・オレゴン・フリークライミング、オリ根・奈良沢川三ツ石沢、朝日・荒沢ほか

◎すずらん通信 NO.272 2003.11 B5 8P 鈴蘭山の会

野沢温泉スキー、谷川・赤谷川小出俣沢マチホド沢、奥只見・中ノ岐川灰ノ又沢、事故報告ほか

◎すずらん通信 NO.273 2003.12 B5 4P 鈴蘭山の会

つづら岩岩トレほか

会報

◎ADVENTURE forum NO.13 2003.11 A4 8P 植村記念財団

北極点犬ぞり単独行を取材して、明治大学山岳部・炉辺会ほか

◎年報わらじ NO.26 2003.11 B5 193P わらじの仲間

2002年度の記録。冬合宿・越後・巻機山周辺4本、夏合宿・オリ根5本、春の集中・会越五兵衛小屋跡6本、秋の集中・平ヶ岳5本、訓練山行1本、山行記録・無雪期・東北方面7本、越後3本、オリ根3本、川内1本、会越5本、南会津2本、那須1本、谷川4本、頸城本、北ア1本、白山1本、奥秩父1本、奥多摩1本、韓国1本、ヨセミテ2本、積雪期・越後6本、上信越2本、中央ア1本、ハツ1本、厳冬期・越後1本、谷川2本、頸城2本、北ア2本、上州1本、日光1本、残雪期・南会津1本、越後1本、会越1本、北ア2本、山スキー・上越2本、越後2本、南会津3本、オリ根1本、会越1本、頸城1本、北ア2本ほか

◎すずらん NO.24 2003.12 B5 108P 鈴蘭山の会

山スキーの記録・東北3本、会津2本、八ヶ岳1本、頸城1本、北ア3本、上越1本、沢登りの記録・奥秩父2本、那須1本、谷川1本、只見1本、北ア1本、上信越4本、下だ1本、会越1本、越後1本、上州1本、その他の記録・南ア1本、北海道1本、佐久1本ほか

◎あをい NO.47 2003.3 B5 79P 水戸葵山岳会

平成12年度から14年度にかけての記録。第一部・合宿・北南ア11本、第二部・個人山行・ハイキング、岩登り、沢登り、海外の記録20本、その他エッセイなど9本ほか

◎野良犬通信 Vol.8 2003.10 B5 チーム野良犬

青島靖氏の山行記録集。雪稜・木曽駒、山スキー・中ア、頸城、白山、北アなど16本、アイスクライミング・南アと八ヶ岳2本、沢登り・白山を中心に12本ほか

◎野良犬通信 Vol.9 2003.11 B5 チーム野良犬

青島靖氏の山行記録集。雪稜・白山1本、山スキー・頸城、白山、北アなど17本、アイスクライミング・北ア2本、ハイキング・穂高2本、岩登り・明星山と雨飾山2本、沢登り・国内から台湾まで21本ほか

◎年報とまのかぜ NO.10 2003.11 B5 313P 童人トマの風

10周年記念山行・朝日集中8本、無雪期の山・朝日飯豊6本、川内下田会越10本、南会津2本、越後谷川6本、上信越1本、オリ根2本、北海道5本、東北13本、北中ア2本、南ア1本、奥秩父1本、関東周辺2本、中部以西2本、離島海外6本、雪の山・南会津尾瀬2本、越後谷川4本、会越6本、北海道東北8本、佐渡1本、北ア5本、頸城北信5本、八ヶ岳3本、南ア4本、関東周辺3本ほか

以上閲覧したい方は本図まで

編集後記

〔R & V〕も今回で50号を発行します。ここ数年は合併号の発行が多くなりましたが、年4回の発行で13年間を要します。
今後可能な限り会報の発行を継続したいと思っていますので、協力の程
お願い申し上げます。

山に登り続ける意思。その為にトレーニングする意思。
登った山の原稿を書き、会報を発行する意思。
全て、継続は“力”です。

【變臭長】

印刷所：やさと印刷



岩壁、沢、冬山のクライミング集団